

ENCOUNTER

出会いの広場 No.5 1987.7

カール・ロジャーズ追悼号

本号の主な内容

追悼集の序に……………中川 紀子
 カール・ロジャーズの死……………ナタリー・ロジャーズ
 別れの手紙……………ナタリー・ロジャーズ
 カール・ロジャーズの人と業績……………島瀬 稔

第一部 特別寄稿「カール・ロジャーズの死を悼む」

●佐治 守夫 ●都留 春夫 ●友田不二男
 ●伊東 博 ●拓植 明子

第二部 写真構成「ありし日のカール・ロジャーズ」

カール・ロジャーズとともに

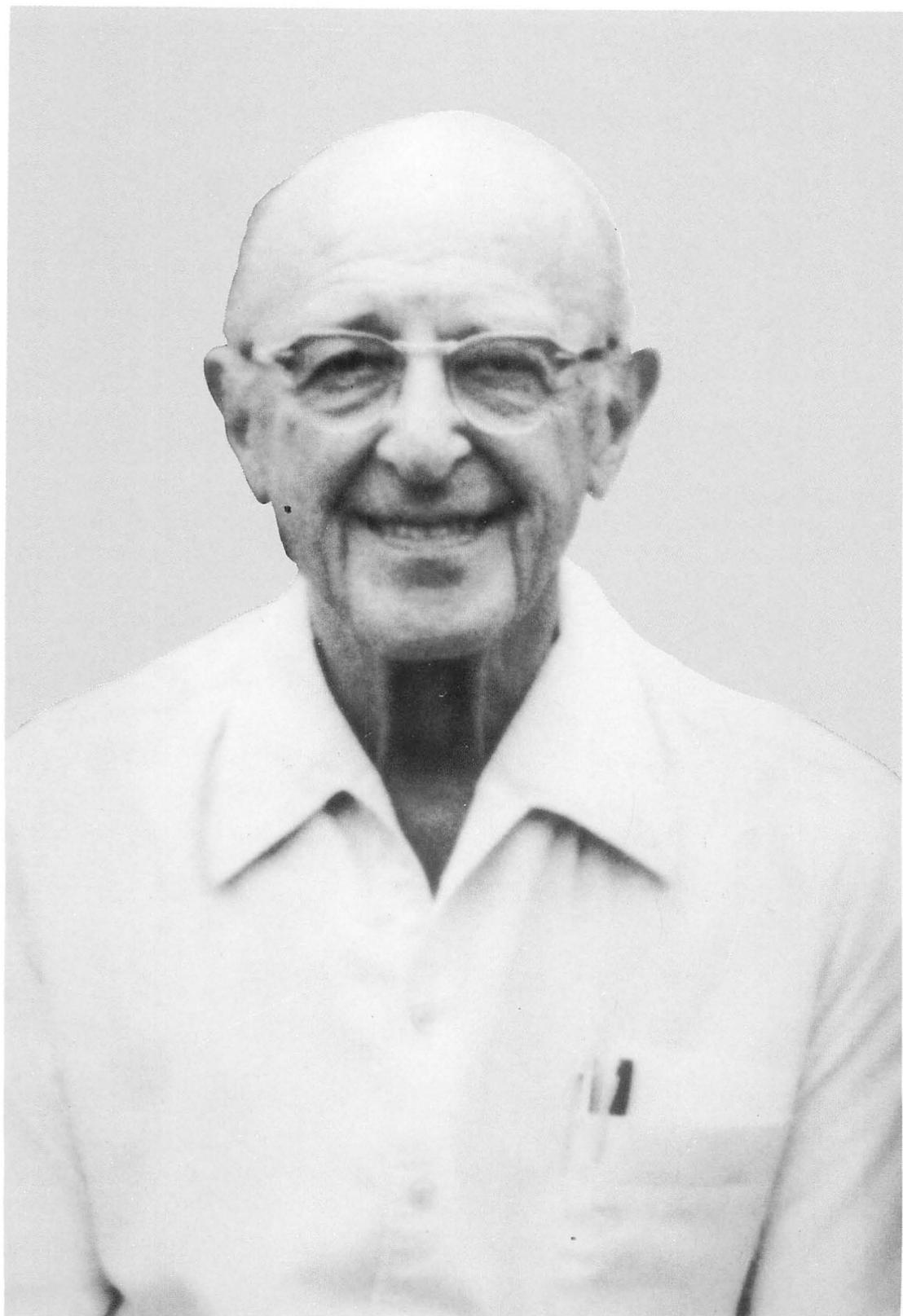
—1983年PCA ワークショップの思い出—……………渡辺 忠
 カールの日本散策スナップ……………島瀬 直子

第三部 「カール・ロジャーズの思い出」

●大須賀発蔵 ●村山 正治 ●多田 治夫
 ●東山 絃久 ●小野 修 ●木村 易
 ●見藤 隆子 ●関 丕 ●増田 實
 ●大須賀克己

第四部 「カール・ロジャーズと私」

●野島 一彦 ●見澤めぐみ ●深本 春夫
 ●伊藤 義美 ●永原 伸彦 ●保坂 亨
 ●柳沢 裕 ●穂積 清美 ●小柳 晴生



ありし日のカール・ロジャーズ (1983年4月29日、国立婦人教育会館の庭にて)

目次

ENCOUNTER
出会いの広場
No.5

追悼集の序に 中川紀子 4

カール・ロジャーズの死 ナタリー・ロジャーズ 5
—追悼号発刊に寄せて—

別れの手紙 ナタリー・ロジャーズ 6

カール・ロジャーズの人と業績 畠瀬稔 8

第一部 特別寄稿「カール・ロジャーズの死を悼む」

心理治療者としてのアイデンティティを得る 佐治守夫 14
確信が革新を 都留春夫 16

ああ天網!! 友田不二男 18
ロジャーズ理論に帰れ 伊東博 20

—ロジャーズ博士と日本のカウンセリング— 伊東博 20
人生と学問の恩師・カール・ロジャーズ先生 柘植明子 24

第二部 写真構成「ありし日のカール・ロジャーズ——日本との再会」

カール・ロジャーズとともに 渡辺忠 26
—一九八三年PCAワークショップの思い出—

カールの日本散策スナップ 畠瀬直子 30

第三部 「カール・ロジャーズ思い出」

我が道を与えられて	大須賀 発蔵
カール・R・ロジャーズ博士を偲ぶ	36
— 4つのエピソード —	
カールおじさん	村山 正治
ロジャーズ先生の思い出	37
ロジャーズ先生と私	多田 治夫
ロジャーズの訃を聞いて	東山 紘久
思うこと	小野 修
天国で母からロジャーズ先生に	42
柔らかく暖かい手	41
よみがえるロジャーズ博士のほほえみ	40
	増田 克巳
	47
	関 丕
	46
	見 藤 隆
	44
	木 村 易
	43
	小 野 修
	42
	東 山 紘久
	41
	多 田 治夫
	40
	村 山 正治
	37
	大 須 賀 発蔵
	36

第四部 「カール・ロジャーズと私」

ロジャーズさんから頂いた「A WAY OF BEING」…	野 島 一 彦
衰えない晩年	見 澤 めぐみ
ロジャーズ先生を偲んで	51
三十分の真実の関係から生れた十五年	深 本 春 夫
カール・ロジャーズと私	52
我々はロジャーズから何を学んだか	伊 藤 義 美
実感・体験・仲間・書物	永 原 伸 彦
カール・ロジャーズの印象	保 坂 亨
ロジャーズ先生と私	54
	柳 沢 清 裕
	55
	穂 積 清 美
	55
	小 柳 晴 生
	57

■おしらせ・情報・あれこれ……………

追悼集の序に

中川紀子

今、六月。私は国立婦人教育会館の一室でロジャース先生追悼号の序を書いている。突然に訃報がおとづれたときの想いは静かに「巨星、墮つ」であった。そして今も空白感を味わっている。

一九八三年、私達は思いかげず、博士とナタリー女史を日本にお迎えすることになった。今、考へれば何とよい機会に恵まれたことであつたか。博士をお迎えするのにどこがよいかと考へた時、私の心の中には、緑の芝生の美しい、ユーカリの大樹の実在するUCSD（カリフォルニア大学サンディエゴ校）のキャンパスが浮んだ。その芝生を歩まれる博士、コミュニテイ・グループの中に静かに坐る博士を考へるとき、それは嵐山らんざん（埼玉県比企郡）の婦人教育会館であつた。五月の嵐山は美しかった。

多くの人達が、日本中からさまざまな思いを抱いて集まり、直に博士にふれることができた。同じフロアーに坐つて博士のデモンストレーションを体験し、「老い」についてのセッションでは学ぶことが益々重要になってきたといわれ、「靴をはいたまゝ死にたい、いつまでも活動的でありたい」という印象的なことばを残しておられる。そして新しい科学を求め、地球社会の現状を憂い、国家間の政治的対立の緩和に積極的に取り組まれ、南アに、最近ソビエト連邦にまで自らを運ばれておられた。

今、嵐山は緑一色、うぐいすやかっこうが鳴く。然し博士の姿はない。

博士は日本に又、世界各国にその足跡をのこされ、数多くの著書と有為の研究者、学徒を育てられた。それらの方々の追憶の想いが今、この追悼号にこめられ、哀惜の念を深くするにちがいない。

私の中の最後の博士は、紺の作務衣姿で彌勒菩薩を手にされる老僧の姿である。

ご冥福を心から祈りつゝ。

合掌

なかがわ のりこ

● 中川学園々長・人間関係研究会一九八七年度代表

カール・ロジャーズの死

ナタリー・ロジャーズ

(崑瀨 稔 訳)

(ロジャーズ博士の長女ナタリーさんは、ロジャーズ博士の最後の模様について以下のような手紙を送ってくれました。)

私は人間関係研究会誌の次号が、私の父カール・ロジャーズ特集号になるとのお手紙を読んで喜んでいきます。次の報告が、カールの死についての私にできる限りの正確なものです。

カール・ロジャーズは一月三十日夜、自宅ですべて尻もちをつきました。友人や仲間と一緒に家にいましたが、尾骨を損傷したことに気づきました。救急車が呼ばれ、ラホイアのスクリップス・クリニック病院へ運ばれました。一月三十一日の土曜日、尾骨の治療のために手術がなされました。手術は大成功で、土曜日の午後、彼はベッドのふちに坐っ

て友人たちと話していました。土曜日の夜、心拍停止に陥ったのです。看護婦が苦しい息使いを聞いて、直ちに人工呼吸による蘇生のために救急装置を呼びました。人工呼吸がなされましたが、十分に蘇生させることはできませんでした。彼は友人と家族の見守る中で、二月一日、二月二日、二月三日と昏睡状態を続けました。

彼のまわりにいた人達にとって、その中には息子デビッド・ロジャーズ、娘のナタリー・ロジャーズもいましたが、それはたいへん感動的な経験でした。カールが数日間昏睡状態であったということは、多くの人が病院に来て、さようならを云う機会を与えたことになりました。カールは反応することは出来なかつたのですが、愛する人達が彼をもう一度訪ねるに充分なだけこの世に居続けたように思われたのです。

彼は苦痛なく世を去りました。それはあたかもあの世へ去りゆく準備ができていたかのようでした。我々は彼がこんなに安楽に、何らの苦痛なしに亡くなったことを、皆で喜びました。

一九八七年四月二十二日

別れの手紙

ナタリー・ロジャーズ

(畠瀬 直子 訳)

最愛のお父さん：

自分を癒したくて、お父さんを失った私の喪失感を癒したくて、海にきました。あなたはねがい通りに亡くなりました。とうとう最後まで、精神力は十二分に活動し、意味と楽しみに満たされた人生でした。お父さん、言っていましたね。「靴をはいたまま死にたいな」って。お父さん、そうできませんでしたね。はてしなく広がる青い水平線をながめて座っています。「お父さん、どこへいつちゃったの？」お父さんが亡くなって三日後にみた夢が思い出されず。

私は、一群の人々と口論している夢を見たのでした。私は必死で言いました。「もうひとりの人を月に送る必要なんてないわ！ お金がかかりすぎるし、意味がない！」その時、私は真夜中の空を見上げ、男の人の頭の後ろを認めました。その人は、体は見えませんが、巨大な白い月に向かって一直線に進んでいくのです。決断と目的に満ちて——その見えない体が、まっしぐらに月に向かって舵をとっているみたいでした。「ああ、お父さんは月に行くロケットなんて持たなくていい！」私は、そうさけんで、目覚めました。夢でみたのはあなたの後頭部だったと悟り

ました。あなたが白い光りに向かっていく姿は、あなたが人生のあらゆる時にいかにも楽しそうにしていたのと同じでした。

この別れの手紙で、涙と悲しみのはてに、私がお父さんに語ることができるのは、よろこびと苦しみの記憶なのでしょうか？

他の人々はあなたの学者としての業績について書くでしょう。お父さんのたぐいまれなインスピレーション、近年とりくんだ南アメリカ・オーストリア・ソ連での影響力。黒人対白人の葛藤緩和へのとり組み、平和のための人から人へのアプローチ。

あなたの娘であるという特殊な立場にいますので、私の記憶はあなたと共にすごした日々

にひろがっています。子供だった時、すばらしいお父さんだとかから実感しました。あなたはものすごく忙しいお父さんで、昼間は児童相談所で働き、夜は書斎で書きものをしていました。でも、私達は、セネカ湖で格別の家族の時間をすごしました。あなたは家族のための丸太小屋をたててくれました。わたしはあなたにくっつきまわって、建設プロジェクトに入用な釘やかなづちを持っていききました。あなたは内気だったし、あなたに近づくには一緒に働くのが一番でした。

幼い日のわが家の思い出といえば、あなた

この詩は、AHP Perspective (アメリカ・ヒューマニスティック心理学会ニュース・レター) 1987年4月号に掲載されたものを、筆者の許可を得て、翻訳、転載した。

とお母さんが作ってくれた花園で、愛と信頼と希望にみちた花園で、育ったなということ。わが家は聖域で、反逆は許され、何だって質問を許され、自分自身になることができました。

物思いにふける少女時代、お父さんは信頼できる友人でした。あなたは、私の哲学じみたジレンマや小さな愛の悩みに、批判しないで耳を傾けてくれました。あなたは決して助言をしないで、心から共感し、理解し、支えてくれました。お父さんの愛を私は知りませんでした。幾歳月が流れ、私達の生活も変化し、私がお父さんの親友になることができ、私は本当に嬉しかった。

ボストンからカリフォルニアに移り住んだ時、ひとりの専門家として、お父さんを訪れて言いました。「お父さんと、仲間として仕事をしたいの。」「そいつはいい。さて、何をやるかな？」一週間のうちに、私達はパーソン・センタード・ワークショップを立案しました。スタッフとの交渉も行いました。このグループは、夏ごとに7年間も続き、世界中の何百人という人々の生きざまに触れることができたのです。活動の中でお父さんを見つめるのは本当に嬉しいことでした。フィルムもビデオも、あの瞬間ごとのあなたの真髄をとらえることはできないでしょう。やはり、あなたを知るには共に働くのが一番でした。

お父さん、私が自分をありのままに生かした専門家となるための場を与えて下さって、本当にありがとう。それは、私にとって長い年月でした。まず、あなたの考え方・仕事・生き方を吸収し、次に自分自身の専門家としての小道を、私の生き方を、見つけ出したのです。お父さんとその闘いをよく語り合いましたね。社会が女性に負わせている苦難に対する私の怒りもね。

私はお父さんの『引っ張っていかないスタイル』を受けとめるのが難しかったけれど、お父さんは私の構成的リーダーシップを受けとめるのが難しかったですね。最後の数年間私達がお互いの違いを理解し認めるようになって、私は本当に嬉しかった。

私が、とりわけ淋しいのは、お父さんを必要とする時、電話のむこうに声を聞けないことです。お父さんと確信をわかち合えないことが淋しいのです。私は、お父さんの愛情に満ちた抱擁と絶えることのなかったはげましを恋しく思います。

水面に目をやると、雨のつぶが海に落ち、消えていきました。

お父さん、安らかに。

ナタリー

カール・ロジャーズの人と業績

島 瀬 稔

カール・ランサム・ロジャーズ (Carl Ransom Rogers) は、一九〇二年一月八日、イリノイ州オークパーク (シカゴ郊外) で生まれた。両親とも当時としては珍しく大学教育を受けており、父はヴィスコンシン大学で工学を専攻し、大学院にも一年在籍、母も同大学に二年間学んだが、結婚のため中退している。父はコンクリート工学の専門家で、全米各地の建設に向向いた。傍ら、趣味として農場を科学的に経営し、母も園芸を好んだ。

この環境下で、彼は少年時代から農場で労働し、また生命の成長に関心を発展させた。十五才の時、農場近くの森で発見した美しい蛾に魅せられ、卵の採取、孵化、幼虫の飼育からさなぎ、成虫に至る過程に、専門書を調べながら成功するなど、既に「研究」に熱中する生物学者のようであった。また、父親の書棚から牧畜、土壌、肥料、実験条件、比較統制群、統計的分析など、科学的農学の知識をいつのまにか吸収していた。一九一九年、自然の成り行きで、ヴィスコンシン大学農学部に進み、科学的農学を志す。

ロジャーズ家は厳格なプロテスタント一家であった。学生時代 Y M C A 活動に積極的に参加、これからの世界を救うのはキリスト教の研究と伝導活動だという考えになった時、農学部にとどまるのは

もはや無意味と感じ、二年の時、史学科へ転じた。牧師になる準備のためには、広範な歴史学的教養を必要とすると認識していたからである。一九二二年、北京での世界キリスト教学生会議に、アメリカからの一〇人の代表の一人に選ばれ、六カ月の東洋旅行をした。この時、日本 (富士登山を果している)、中国各地、フィリピンと旅行したが、船内、会議、各地での見聞、交流は「人生最大の経験」となったと云う。この時以来、自分の目標、価値、哲学を自分で選択することが出来るようになったと感じており、保守的な家族の影響から情緒的に独立した。

一九二四年、一年遅れて同大学卒業。卒業後八月に、小学生時代の同級生ヘレン夫人と結婚。九月にニューヨークのユニオン神学校に入学した。双方の親ともに、学生の身分での結婚に反対していた。さらに、カールの父はユニオン神学校行きにも反対し、フンダメンタリスト (米國プロテスタントの中で聖書の記事を一切正しいとする保守派) の中心であったプリンストン神学校へ行けば二人を経済的に援助しようとするが、彼は憤然とそれを断り、当時最もリベラルで、宗教界の知的リーダーであったユニオン神学校の試験に通って、奨学金を獲得した。

ユニオン神学校での学習はすばらしい経験の日々であった。中でも「個人を援助する方法（今日のカウンセリング活動）」に関心をそられ、人々を援助することが職業として成り立つことを知る一方、特定の宗教的教義を信ずることへの疑問も高まっていた。当時、単位の互換性が認められていた近くのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ大学院の教科の方により関心をもち、神学校を二年で中退、ティーチャーズ・カレッジ大学院に移籍、臨床心理学、教育心理学を専攻。そこで、ホリングワースの臨床心理学やジョン・デューイの弟子W・H・キルパトリックの生徒の能力と興味を重視する進歩主義教育に感銘を受けた。以来、デューイの思想の影響を受けた。一九三一年、コロンビア大学から博士号を取得した。

大学院在学中の一九二六年から、ニューヨーク市児童相談所の研修員となり、折衷的フロイト派を主流とした同相談所と、感情面と人格力動を軽視し、測定と統計を重視するティーチャーズ・カレッジの狭間に、共通の場のないことに迷う。その兎相の折衷主義の影で、色々な考え方にふれる機会をもった。



一九二八年からロチェスター児童虐待防止協会児童部に勤務。そこは裁判所、各機関から送致された非行少年、虐待児の診断、更生保護を目的としたものであり、処遇面接の効果的方法を模索する日々が続いた。当時の諸権威の理論が、現実の理解に合わないことを経験し、自分自身の経験を重視する方向に進む。その頃、週末に招いたオットー・ランクの治療理論に好意を感じている。それは、患者の過去の生活史を分析するより、現在の治療関係の中での患者

の自己洞察と自己受容に焦点をあて、患者の積極的な意志の支持者となるうとするものであった。一九三八年、同所がロチェスター・ガイダンス・センターに改組されたが、児童相談所の所長は精神科医であるべきだという主張と激しい論争の後、ロジャーズが最初の所長となった。それまで事実上のヘッドであったのに、改組されると精神科医が所長になるべきだという当時の慣行に納得できなかったというわけだが、以後のシカゴ大学時代も精神医学教室からカウンセリング・センターが治療行為をしているという理由で閉鎖を迫ったことに抵抗するなど、ロジャーズは臨床心理学の職業的自立の歴史をかちとるための孤独な戦いを続けていたのである。

ロチェスター児童相談所での経験をまとめた「Clinical Treatment of the Problem Child」（一九三九年、邦訳ロージャーズ全集第一巻）が認められて、一九四〇年、オハイオ州立大学教授に迎えられた。そこで開始したカウンセリングと心理療法のスーパービジョンと訓練は、大学で行われた最初であろうと云われる。録音技術の播籃期の当時、録音に基づいたカンファレンスと面接の実証的研究を開始したのも彼が最初である。殆どの臨床家は面接後に記録することによって、自分の面接を恰好よく見せたがるが、彼はありのままの事実を検討することなしに、面接の科学的発展はありえないと考えたのである。この精神は、後年、面接場面の映画制作、ビデオによる録画へと進んだ。これによって、従来密室の作業とされた心理療法につきまとう神秘のヴェールをはぎ、科学的探求への扉を開いた。

一九四〇年十二月、「カウンセリングと心理療法における新旧両見地」を発表、従来の諸方法は治療者が多かれ少かれ権威をもってリードする指示的立場であり、彼が発展させつつある「個人が自己理解を深め、本人自身が主体性をもって自己選択することを援助する新しい方法」をノンディレクティブ・セラピーとした見解は、以後十数年間にわたる大論争を巻き起した。その考えを中心にした

“Counseling Psychotherapy”（一九四二年、邦訳ロ全集第二巻）の出版は、カウンセリングの実践と研究に一時期を劃すものとなった。同書には一事例の面接の完全な逐語記録（邦訳ロ全集第九巻）を含んでおり、ロジャーズの主張する新しい方法を公開した意義は大きかった。本書以降“患者”の代わりにクライエント（来談者）という用語がこの分野に拡まった。“患者”は、医学分野で、医師の管理下におかれることを意味するのに対し、クライエントは自分の意志で来談し、自分に責任をもつ人を意味する。ロジャーズがこの用語を使用し始めたのは、カウンセリングや心理療法でうち立てようとする彼自身の治療関係を象徴するものであった。

一九四五年、シカゴ大学教授、同カウンセリング・センター所長となる。心理療法の効果およびプロセスに関する大規模な協同研究の展開を始め、彼の生涯を通じて最も実り多き十二年間であった。カウンセリング・センターの人間中心の理念での運営は、全スタッフの意志と力を自由に発揮させた点で、組織運営と管理に一つのモデルを提供した。一九五一年発行の“Client-centered Therapy”（ロ全集第三巻他に分訳）は、一九四二年の本が“非指示的”という技法重視に受けとられる要素を含んでいたことを訂正し、心理療法関係は技法よりクライエントの自己実現力を純粹に尊重する態度が必要であることを強調した。本書は、以後の心理療法とカウンセリングの基本的あり方を提示した点で、最大の影響を与えたと云われる。一九五七年発表の論文「治療的人格変化のための必要にして十分な条件」（ロ全集第四巻所収）は、従来の心理療法諸学派が技法論に傾きがちな点を抑え、最も基本的な治療関係設定にポイントをしぼって明快に整理した点で、「コペルニクスの展開をもたらした」と評され、以後多数がこの論文を引用している。アメリカ心理学会の最近の調査（Smith, D., 1982）は、現在最も影響力のある心理療法家三名（故人を含む）を順位をあげて選ばせたと、ロジャーズが第一位であることを示している。

一九五七年、ヴィスコンシン大学心理学、精神医学併任教授となる。一九六一年、今まで書いた諸論稿をまとめて“On Becoming a Person”（ロ全集第四、五、六、十二巻に分訳）は、ヒューマニスティック心理学の基本理念を普及する一般書として大衆的人気を博す。一九六二年には、マズロー、メイなどと共にアメリカ・ヒューマニスティック心理学会の創設者となり、以来死の直前までヒューマニスティック心理学の重要な発言者であり続けた。



一九六四年、カリフォルニア州ラホイアのWestern Behavioral Sciences Institute (WBSI) のレジデント・フェローとなる。以後、今まで集中してきた個人心理療法の知見を、一般対人関係の改善・促進に発展させ、“ベーシック・エンカウンター・グループ”の名のもとに、教育、家族、地域、企業などの人間関係のヒューマニジング、人間性開発運動を進める旗頭となった。彼はファシリテーターとなったエンカウンター・グループの記録映画“Journey into Self”（日本版「出会いへの道」）は、一九六八年のアカデミー賞長編記録映画部門で最優秀作品賞を得た。

一九六八年、WBSIの一部スタッフと共にCenter for the

Studies of the Person (CSP) を創設。それは各スタッフの相互尊重と協同、学習の刺激、最小の管理など、念願としてきた組織としての先進モデルをめざしたものである。このCSPで、エンカウンター・グループを基本的の方法として、大教育組織の変革、地域的文化的葛藤の解決、国際的紛争の解決などをめざす大規模プロジェクトを次々と積み上げていった。中でも、北アイルランドのベルファストにおけるプロテスタントとカトリックの紛争解決へのアプローチとして、両派のメンバーから構成されるエンカウンター・グループの記録映画「Steel Shutter」（鉄のシャッター、一九七三年）、中米の政治衝突解決のための十三カ国政府高官四十人を含めたエンカウンター・グループ（ウィーン・ピース・プロジェクト、一九八五年）、南アフリカの黒人対白人の対立解消をめざすエンカウンター・グループ（一九八六年、一九八七年三月には再び南アフリカ行きが予定されていた）、一九八六年九月二十五日から三週間ソビエトに滞在して、カウンセリングとエンカウンター・グループのワークショップをもち、ソ連専門家達との対話の可能性を開くなど、活動の衰えを知らなかった。これら一連のプロジェクトを推進するたゞの Carl Rogers Peace Project : Person-Centered Approaches to Peace を作り、米国内のみならず諸外国の専門家の支援をえて、活動の拡大と恒久化をはかろうとしている矢先であった。「靴をはいたまま死にたい」という生前の言葉通りの死であった。

*

ロジャーズの業績と影響は広範にわたっているので、語りつくせない。その主要なものを挙げてゆくと、第一に、心理療法が精神医学や一部専門職の独占だった時代に、非医師に門戸を開いたことだ

ろう。それは、バラプロフェッションや素人（いのちの電話その他ボランティア）の活躍、資質の向上、ラディカル・セラピーの運動の支えとなった。この背景には、ロジャーズ以前には医学モデルに従っていた臨床心理学（専ら診断が重視されていた）を、正常人に潜在する成長力を開放し、自己実現的人間へと援助する心理学への一大転換を成し遂げたこと、従来神秘化されてきた心理療法のプロセスと成果に科学の光をあてたことがある。これらの貢献に対して、アメリカ心理学会は、一九五六年に研究に対する特別貢献賞を、一九七二年には心理学を職業として独立させた貢献に対する職業特別貢献賞を贈った。それぞれ賞設定の第一回受賞者であり、現在まで両賞を受賞した唯一の人物である。

ロジャーズの仕事は、心理学の専門分野にとどまらず、人間と人間関係の問題に広範な影響を与えてきた。特筆すべきは、民主的社会の構成員の参加的姿勢を強めたことへの影響である。企業の民主化、参加的経営、組織開発におけるマネージメント・トレーニングに、ロジャーズの参加的理論は大きく貢献した。教育分野でも、学習者中心の授業、人間中心の教育、大教育組織のヒューマニゼーションへと大きな道を開いた。健康や福祉の分野でも、主体性と責任あるセルフ・ヘルプ・グループの誕生に役立った。都市計画や福祉に、住民自らの考えを尊重するという基本的動向にも大きな影響を与えた。親子関係における親の権力中心型を放棄させ、子どもの権利を尊重する新しい考え方を提供した。これら一連の姿勢は、権力に対する盲目的従順さを打破し、民主主義の理念を徹底的に追求してきたという点で、少数の社会改革者とともにロジャーズの影響は大きい。しかも、このラディカルな権力の転換を、ロジャーズはいつのまにか「静かに」実践を通して提示してきた点で、最後まで臨床家であり続けた。リチャード・ファーンソンが「静かな革命家、カール・ロジャーズ」と評した所以である。

ロジャーズの人物は、おだやかで、尊大ぶらず、知行一致の人であった。彼を偶像視することには抵抗した。彼の名前を冠した「カール・ロジャーズ研究所」あるいは「クライエント中心の協会」を作るとは、晩年まで認めなかった。彼はそのことにより派閥とドグマを信俸する追隨者をつくり、変化・発展への前進が滞ることを恐れた。彼をゴッドとして慕う人の前で顔を赤らめるはにかみ屋であった。

幸にして、彼は数多くの映像を我々に残してくれた。彼は大勢の前で、三十分間の個人心理療法のデモンストレーションを積極的に行った。もし心理療法的面接で何かが起こるとしたら、その三十分間に何かが起こるかもしれないし、事実に基づいた討論の資料を提供することができる、というのが彼の信念である。グロリアとの面接の記録映画（日本版はビデオ「グロリアと三人のセラピスト」の一部）は、現在心理療法の教材として広く使用されている。その面接直後に、感想を求められたグロリアは「面接の初期にはロジャーズ博士の方法を好むが、今はパールズ博士（ゲシュタルト療法）に挑戦してみたい」と語っていた。しかし、その後この映画を見たグロリアは、パールズの方法に批判を表明し、早すぎた死までの十五年間を、ロジャーズとの三十分の「人間的な出会い」に深く影響され続けたという。(Rogers, C. R., 1964) この映画以外にも彼の残した面接場面の映像と録音は多く、今後の学習者の貴重な資料を残した。

*

ロジャーズは日本のカウンセリングと心理療法の発展の支柱ともなってきた。一九四二年の原著「Counseling and Psychotherapy」が友田不二男訳「臨床心理学」（創元社、一九五一年）として紹介され

たのが、日本におけるまとまった紹介の最初であった。それにづくロジャーズの諸著の相次ぐ紹介は、友田訳を中心とした「ロージャーズ選集」（岩崎書店）として、第二次大戦後の日本の臨床心理学、カウンセリング界に広範な読者を獲得し、一九六六年までに全七巻を続刊していった。その翻訳・紹介と平行して、日本の各地でカウンセリング・ワークショップが開催され、その実践の中心的理論は、ロジャーズの説く非指示的カウンセリングまたはクライエント中心療法であった。友田不二男、ローガン・フォックス、遠藤勉、佐治守夫、伊東博氏などが、当時、実践および紹介面で果した影響は大きい。その高まりは、一九六一年（昭和三十六年）の夏、七週間、ロジャーズ博士を日本に招いて、各地でワークショップと講演会を開催するまでとなり、その影響は大きく拡大していった。そして、「ロージャーズ選集」はそれまでのロジャーズの著書と論文を殆ど網羅する「ロージャーズ全集」全十八巻（岩崎学術出版社、後に別巻五巻を加えて全二十三巻、一九六六―一九七二年）となった。その後のロジャーズの新著も相次いで邦訳された。即ち、「エンカウンター・グループ」「人間の潜在力」「人間尊重の心理学」（以上、創元社）、「人は人によりてのみ」（明治図書）、「結婚革命」（サイマル出版）、「新・創造への教育」（岩崎学術出版社）、「エデュケーション」（関西カウンセリング・センター、現在絶版）、それにエンカウンター・グループの記録映画「出会いへの道 個人面接のビデオ「グロリアと三人のセラピスト」（以上、日本精神技術研究所）による映像とともに、ロジャーズの実践・理論は日本のこの分野の貴重な学習資料となっている。また、CSPのプロジェクト主催になるラホイアのエンカウンター・グループ・ワークショップに参加する日本人も年々相次ぎ、延べ数百人に上ると思われる。カウンセリングと心理療法に、人間中心の教育に、企業、組織開発、マネージメント・トレーニングに、親業訓練に、ロジャーズの名前を直接冠せ

ないまでも、その考えを基礎に発展したトレーニングや思想、実践的方法の影響を受けた人は、ぼう大な数に上るのであろう。

一九八三年四月末から二週間、我々人間関係研究会は、ロジャーズ博士と長女ナタリー・ロジャーズを日本に招待した。それは、老いてもなお前進を続ける最近のロジャーズを日本人々に紹介すると同時に、長年の日本の斯界への貢献へのお礼の意味で、日本の春をゆっくりと楽しんで貰うために企画した。埼玉嵐山の国立婦人教育会館での五泊六日のワークショップでは、八十人に限定した参加者を前に、対談とデモンストレーションに円熟した境地を示してくれた。六百人を前にした一日公開ワークショップでは、午前・午後とも壇上で（我々はどちらか一方だけを希望していたのだが）、パーソン・センタード・アプローチとニュー・サイエンスに至る広範な問題を熱っぽく語り、八十一才にしてなお前進をつづけるロジャーズを強く印象づけた。

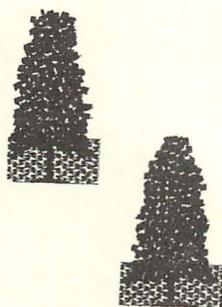
ロジャーズは、一九八七年二月四日、八十五才でその生涯を閉じた。我々はかけがえのない、偉大な先達を失ったことになる。ニューヨーク・タイムズ、ロスアンジェルス・タイムズその他、アメリカの新聞各紙の二月六日号は、ロジャーズの死を大きく報じた。「パースペクティブ」(四月号、アメリカ・ヒューマニスティック心理学会のニュース・レター)、「パーソン・センタード・レビュー」(二巻三号)は、それぞれ追悼号を予定している。日本でも、「カウセリング」(全日本カウセリング団体協議会発行、No.70、71)「エンカウンター通信」(福岡人間関係研究会、一六五号)がロジャーズ追悼特集号を発行した。何故か、日本の新聞にはロジャーズの訃報は一行も報ぜられなかった。本誌は彼の死を悼み、彼の遺志を受け継ぐものが日本にも数多いことを考え、人間の成長と地球上の平和に生涯を捧げたロジャーズを記念するために編集された。

引用文献

- Smith, D. 1982 Trends in counseling and Psychotherapy. American Psychologist, vol. 37, No. 7, 802~809.
- Rogers, C. R. Gloria—a historical note, in Levant, R. F. & Shlien, J. M. eds. 1984 Client-Centered Therapy and the Person-Centered Approach : New Directions in Theory, Research, and Practice. New York : Praeger.

ロジャーズの自伝、業績についての主要参考文献

- 村山正治訳 カール・ロジャーズ自伝(佐藤幸治・安宅孝治編
現代心理学の系譜—その人と学説—第一巻、岩崎学術出版社、一九七五年、所収)
- 佐治守夫・飯長喜一郎編 ロジャーズ・クライエント中心療法
有斐閣新書 一九八三年
- Kirschenbaum, H. On Becoming Carl Rogers. New York : Delacorte Press, 1979.



第一部 特別寄稿

カールロジャーズの死を悼む

● 心理治療者としてのアイデンティティをうる

佐治守夫

Rogersさんから学んで三〇余年たったな
とつくづく思っている。彼の死にまつわる私
個人の追想、追悼は既に四編ほどの短文に書
いた。

彼は死んだけれど、私の中に生きつづけて
いる彼から直接間接に学んだことについて少
し書いてみたい。特に最初の彼の著書との出
あいの頃について。

一つは心理治療、精神療法における医学モ
デルとは異なる方向で、カウンセリングやセ
ラピイを明確に位置づけた彼の姿勢に、私自
身がどのように支えられ、心理学の立場での
アイデンティティを作りあげてくるのに役
立ったかという点についてである。昭和二七
年にその当時W・H・Oの勧告で日本にでき
た国立精神衛生研究所に勤務した私は、心理

療法やカウンセリングについて全く経験を
もっていなかったし、また、精神分析学につ
いてもフロイトの著作の点数を少しづつ紐解
いていた位で、理論的な勉強も何もしていな
かった。ネオフロイディアンの著書の翻訳
が盛んになりはじめてはいたが、最近ようや
く和訳が出版されたH・S・Sullivanの難解な
英語になやまされていた記憶が最も生々しく

残っている位で、特にどの著者に強く傾倒するという所には至っていなかった。まわりの風土もパラメディカルな領域と私達を見てはいたが、医者でないものが心理治療にたずさわることへの批判や非難が、一部の医者たちからとても強く、折にふれ浴びせられるというようだった。サリバンの「対人関係の専門家」という言葉にある希望と期待を抱いてはいたものの、治療的対人関係の実態となるとやはり五里霧中であつた。

その時、Rogers, C. R. "Counseling and Psychotherapy" 1942²⁾であつたのが、大きくいうと私の後を決定づけたといつてよい位大きな出来事であつた。特に第二章の「カウンセリングとサイコセラピーにおける新旧二つの見地」の新鮮さ、その中に引用されているカウンセラーとクライエントのやりとりの抜粹、第四章の「カウンセリング関係の創設」における関係の基本的特質を説く彼の熱っぽさは、原文を読むのに苦勞しながら惹きつけられている私に、ひどく響いてきたことをおぼえている。

この本の中のカウンセラー・クライエントの言葉を通じてのコミュニケーションの抜粹は、その当時思っていた「対人関係のエキスパート」とは何かという問いかけに一つのヒントを与えてくれると思え、この著書の中の「ハーバート・ブライアンのケース」に

つけられていた細かい註釈（たとえば、このカウンセラーの応答は、クライエントの次のような展開を導きだすのにどう役に立っているか、とか、この際の沈黙はどのような意味を相方を感じさせたろうかなど……）の一つ一つが、半分は意味が充分に分からぬままに強く印象に残つたものだった。昭和二八年だつた。

それから約一年後、昭和三〇年、Snyder, W. U. の編集した "Case Book of Non-directive Counseling" (出版が一九四七年) を手に入れることができたあとは、いわゆるクライエントの感情の明確化とはどういう言葉を用いたらいいのか？感情の反射とは？など仲間同志でずいぶんやりあつた思い出がある。ぼんやりとクライエント中心の反応はこんな風なのだろうと思つていた私に、一つの明確な手掛りを与えてくれた、なつかしい思い出もある。

それと同時に、いわゆる「治療者の権威」とか「解釈による洞察への方向づけ」とか語っているまわりの治療者たち（医者たちが多数派だったが）とは違つ自分なりの治療者としての存在証明（自己同一性、アイデンティフィケーション）を、面接そのものの中での自分の応答のあり方に見出そうとするようになつて行つたと言える。

この姿勢は、その最もベーシックな所で今もゆるいではない。

この時期に学んだことは、大きく次の二つの点にまとめられる。自分自身が面接をするときの直接の目標としての「クライエントの展開を援助するコミュニケーション」はどのようになつてえられるか」という課題で、自分の存在証明とかかわり乍ら生れたということ、これはRogersさんの本に最初にであつた衝激と共に生々しい。

第二に、カウンセラー（治療者）の応答と、その持つ意味が、クライエントの展開という事実と対応させつつオープンに示されていることの「明快さ」が、印象深く心にやきつけられたことである。これこそ心理学的立場からの「心理治療」の解明の出発点だと思えた。その後数年間にわたつて、クライエントとの応答の逐語的検討を行い、あるカウンセラーはどういう応答を、内容カテゴリーの分類の上で多く行つ傾向があるかなど検討したり、一方で治療効果の測定を既製のテストによらないスケールを用いて行つにはどうしたらいいかなど考えることになるのだが、その導きは、Rogersさんの初期の姿勢に専ら動かされたのだなと、つくづく思つている。

● 日精研・心理臨床センター所長 東京大学名誉教授
さし もりお

確信が革新を

都 留 春 夫

Carl Rogers 永眠の報を受けてから二ヶ月になります。この間何度か Rogers が八〇年代に書いたものを読み、その生涯をふりかえてみる機会を与えられました。

Rogers 自身は自分が臨床活動を始めた年を一九二七年としていますから、一九八七年はその時から教えて六〇年目になります。この長い臨床生活を通して Rogers の生き方を特徴づけているのは、一貫して genuineness を追い求めつづけた姿勢にあると思います。

「自己一致」「真実」「卒直」などの邦語に当たると考えられる genuineness という述語の意味を十分に把握するのは簡単ではありません。「対人関係の中で、瞬間瞬間の自分の状態を、ひとにも自分にもごまかさず、心の動きをかくさない」といえば、いくらか近づけるかと思えます。

Rogers 自身も、四六時中一〇〇パーセント genuine であることは不可能だと言ってい

ます。また、若い頃既成の理論に挑戦したい気持が強かった頃は、りきみがあつた分だけ genuine になりにくかったときもあるのではないかと思えます。

child guidance clinic の仕事を始めてから自分の面接が既成の方法のどれとも違う新しい接近法をとっているのだと気づくまでに約一五年かかり、そこから「自己一致」「無条件の尊重」「共感的理解」を「心理療法に必要十分条件」として論文発表するまでには更に一五年をかけています。

これらの3つの条件は相互にからみ合って実際行動にあらわれます。共感的理解と無条件肯定的尊重がはたらく中で自らの気持を卒直にあらわす場合、怒りや不満などの感情がそのままのかたちで爆発するわけではありませぬ。しかし、初期の頃に比べると晩年になってグループやコミュニティの中にファシリテーターとしているときのロジャーズは、

ずっと自由に愛情や怒りの感情を素直に表現できたようです。

もともと恥かしがりやですし、宗教教育の敵しい家庭に育つたという背景もあると思いますが、感情の表出はあまり上手でなかったようです。七〇才を過ぎてからもまだ、ひとへの暖かさのこもった心の動きでさえも、表情だけでなく、全身の動作で示すこと、殊に愛情を言葉にすることや、ひとのからだに触れるには努力を要したようです。怒りをもう少し正直にあらわすことができれば、出会えたひともしただらうと話されたこともあるそうです。

genuine とは必ずしも心が澄み切って透明になっているということではないようです。濁っていたり、曇っていたりするなら、それはそれなりに自ら認め、ひとにもそのことをかくさないという意味で透明だといえるでしょう。つまり中が澄み切って矛盾や葛藤が

ないのではなく、フィルターが曇っていないということではないかと思えます。

このように年が進むに従って真実さ、卒直さ、自己一致度が高まり、また自分の接近法の解説につかう表現がやさしくなっていた。蔭には、ロジャーズの確信の深まりがあると思えます。

若い頃から一番頼りにしたのは個人の経験ということ。相手のところの動きを理解するためにはその人の経験をその人の内側からみようと、相手と接している自分の内面の経験もまた大切な拠どころとしていました。経験と理論が一致しないときは経験の方を重視し、経験に合わない理論にはとらわれず、その組み替えを試みます。

そうしていくうちに自分の経験に確信もてるようになる、そこから暫定的な仮説を導き出し、いろいろと可能なたてを考案してその証明につとめます。彼のおこなった研究や、書いた論文の多くは、他の人々を納得させるというより、自分自身の確信を深めるという意味でより重要な役割りを果たしていたのかもしれない。

ロジャーズは確信を強めるための努力をおこなったのと同じように、それが教義的にかたまり、その表現法が公式的になる方向には進まないようにつとめていました。経験が積重ねるに従って確信の方を少しずつ変形さ

せますし、公式をひとに押しつけることは勿論、自分自身にとっても形式化し技法化してしまわないようにしていました。

すべて公式化、制度化されたものは硬直化して柔軟性を失うという確信は、人間研究センターの運営の仕方にもあらわれていたようです。

一九七五年にお会いしたときに「一度制度化したものは、一〇年毎位にこわした方がいい。そうしないと硬直化してしまうから」と言っておられました。

注意深くたしかめた上で到達した確信を忠実に遂行するということが、ロジャーズ自身常に革新的でいられるようにしたばかりでなく、ロジャーズに接する人の中にも革新を起こさせたということができると思えます。

相手の出方によって態度や動きの原則を変えることのないロジャーズの存在のしかたは、必ずしも対人関係をよくするのに役立ったとは言いきれませんが、ワークショップのある朝やと隣りに坐って食事がとれると嬉ぶ参加者に対して「私は少しつかれていきますので」と言って席を立ってしまおうロジャーズには、自分の気持ちに忠実ではあっても、相手の気持ちを十分に察知した上で、相手のために行動しているとは言いきれない何かが残ります。しかし、そういう一貫性は、別な見方をすれば、それがロジャーズらしさであることを知れば、

こちらからの距離はとりやすくならないことがありません。このことはクライエントに対するカウンセラーのありかたとして重要な何かを示唆しているように思えます。

自分の確信したことを忠実にまもっているロジャーズの動きに接した多くの人々の中に、いろいろなかたちで革新が起こりました。自分の可能性をあらためて発見したり、見失いそうになっていた方向を見つけないおしたり、人格の変容といえるような革新も起こりました。普通的手段では到底一堂に会せないと思える程に、思想、主義、信条、信念の異なる人々との間にも新たな共存への光がみえるという革新の可能性が起こりつつあることがうかがえます。

これだけ多くの国々の異種の人々の中に革新の可能性を起こさせ得る程に強い確信をもって、人々の中に入っていく人は、ロジャーズと志を同じくしていると思っている者の中にどれだけあり得るのでしょうか。

経験から得た確信の深さ、その確信を実践してゆく意欲と意志の強さ、そして実行しつづければ必ず望ましい何かが起るに違いないとする信念の強さ、そしてそれを死の直前まで遂行しつづけたところにロジャーズのロジャーズらしさがあると思えてなりません。

つる はるお

国際基督教大学教授

ああ天網!!

友田不二男

「ロージャズが亡くなられたそうです」としたためた一片のメモ用紙が、机上に積まれていた小包類や書翰類の束の中に見出されたのは、昭和六二年二月十六日(月)の午后四時ころ、十泊十一日の旅行から帰宅してのことでした。いつ、どなたが、どのようにしてお知らせ下さったのでしょうか? 誰の筆跡とも見定め難く、発信者名もなければ受信者名もない一片のメモ用紙。気づいてみれば

「信憑性はゼロにも等しい」のに私は、なんの疑いも抱かず、したがって真相を問ひ質したり確かめたりする動きも取らず、しばし

「カールが死んだ!?—死んだのか!?!」と声無き声を発しておりました。回顧して言葉にすれば、それは、「ポツカリと穴のあい

た空虚な胸郭を声無き声でせせと埋めようとしていた」と言っただけでしょう。

しかし、そのような己れの状態に気づいたその時点では、名伏し難い「憤り」のような感情に包まれて、「カールを擲り上げてしまった天網の構造と特質を見定めなければ……」と構えておりました。

「天網恢々、疎ニシテ失ワズ」(老子 第七十三章)

と。「広大無辺」というも愚かなほどに広大な網、しかもその一つ一つの目となると、これが物尺は愚か巻尺でも計りようのない大きさで、——と、一方では万々承知していなが

ら現実には、「理屈抜きで今なら見定められるぞ!!」と思いついていたのでした。またまた気づけば、初春の夕は異様なくらいにただただ静かでした!!

*

翌日と、さらにその翌日と、思いがけない方から思いがけない用件の電話の末尾に、「ところで……」とカールの訃報に触れられたり、出会いがしらに「庭で転んで打ちどころが悪かったんですって……?」と問わず語りに告げられて、「そうか、やはり奇禍に会ったのか!?」と、何かしら「それが当然」だし、「それなら肯ける」といった感じに



蔽われている私の脳裡には、次の孔子の言葉が浮かんでおりました。

「憤リヲ発シテハ食ヲ忘レ、樂シミテハ以テ憂イヲ忘レ、老イノ将ニ至ラントスルヲ知ラザルノミ」(論語 述而篇)

と。そしてここで、私は、「天網の一端がチラリと視野をかすめた」ような気がいたしました。

先年、「新・創造への教育」と題して出版した訳業に従事しながら、私はいくたび「憤リヲ発シテいるカール」を行間・紙背に想い描いたことでしょうか？　そして他方、快哉を叫びたくなるくらいの思いで「楽シんでいるカール」を想い描く箇所に出会っては、胸の緩むのを覚えたことだったでしょうか？

そしてさらに、全巻を通して一言で尽せば、それこそ文字通りに「老イノ将ニ至ラントスルヲ知ラザルノミのカール」だったのですが、——今にして思えばここに、「最後まで残されていたカール自身の不一致」があったのでしよう。つまり、世を去る直前まで「生き生きと生きたエネルギー源」があったのでしよう。——と観じている私であります。

それにしても現代の「医療活動」というものの実態・正体の程、「カールの死」を紹介

て私は、一人でも多くの方々に擬視して頂きたいし、さらに機会あるたびに広く伝えたい思いで一杯であります。私は、「極端」と評されたりもしている医者嫌い・薬嫌いである己れを十二分に承知しているつもりですが、しかし同時に、今になれば、イリッチの「脱病院社会」(金子嗣郎訳)やリフキンの「エントロピー」(竹内 均訳)、あるいはカプラの「ターニング・ポイント」(吉福伸逸他訳)をお読み頂いたら、「現実(即、常識)が極端になっっているために当り前が極端に見える」ことをお察し頂けるのではないのでしょうか？

正直、詳細は不分明なまま、「手術を急がなければ……」、そして「できれば手術などしなかったら……」と、なんともなんとなく残念に思っている私であります。

(追記) 以上をしたためた直後、「出会いの広場No.4」の増田 實のレポートを拝読し、シカゴ大学インタナショナルハウスでの「カールの動き」が顔前に髣髴してしばし消え去らず、回想にふけりました。現実の日程は、いくばくもなく私を、スケジュールに引き戻しましたけれど、芭蕉のいわゆる「無常迅速」が実感的に身に迫ってくることの多い昨今です。

ともだ ふじお
● 財団法人日本カウンセリング・センター理事長

ロージアズ理論に帰れ

ロージアズ博士と日本のカウンセリング―

伊東 博

1. ロージアズ博士にお会いする

最初にお会いしたのは、昭和二四（一九四九）年だったから、日本人で博士に直接お会いしたのは、私が初めてであったかもしれない。戦後初の公式留学生としてミズーリ大学

大学院に留学していた私は、その年の暮、シカゴ大学で博士にお会いすることができた。といっても、ちょうどその時ミネソタ大学の人々が来訪してディスカッションをするというので、そこに同席させて頂いたのだが、内容がむずかしくてまったくわからず、居眠り

をしてしまった。幸いにしてそのことは、京都に來られた時に確かめたら、先生は忘れて下さっていた。

ともあれ、これが初対面であったのだが、その直後、後期の講義で、“Counseling and Psychotherapy”がテキストとして指定された。夜、眠るのが惜しくなるほど熱中して読んだのを記憶している。

昭和三六（一九六一）年七月には、先生が京都大学の「アメリカ研究」という特別企画に來て下さった。佐藤幸治先生のご尽力のおかげだったと思う。このときは、一週間、じっくりと、感銘深く勉強させてもらった。この時、先生の講義を横で通訳してくれた

ローガン・フォックス氏と並んでいる写真が、拙著『新訂・カウンセリング』（一九三頁）に掲載されている。

私自身は、アメリカで博士の本を感激しながら読んだにもかかわらず、帰国の際にはロールシャッハの図版を買ってきたりして、まだ診断・治療に興味をもっていた。それがこの京都大学での講義以来、急速にロージアズに傾いていったように思う。また、それはとくに友田不二男先生の影響によることも大きかった。このころから私は、友田先生のワークショップについて回るようになったのだが、私は友田先生を通じてロージアズを学んだ、と信じている。友田先生は、私よりも早く“Counseling and Psychotherapy”を読ま



れ（ローガン先生の紹介による）、いち早く自らそれを実践することによって確かめておられたのです。渋谷の丘の上で、面接を録音しておられた先生を訪れたことがある。

昭和四〇（一九六五）年の秋には、私が、小、中、高、大学の先生および産業関係の方々とともに、三五日間もアメリカの大学や学校、産業（IBMなど）を訪問しました。そのとき、ロージャズ博士は、ローガン先生のくるまに乗って、ラホーヤからロスアンゼルス私のホテルまでわざわざ足を運んで下さった。とても感激だった。片道でも四五時間はかかったと思う。午後の半日を私たちとじっくり話し合っただけだった。ちょうど少し前に博士が「カウンセリング関係の三つの条件」（一九五七）を公表され、大きな話題となっておりましたので、私は、それは「老子」からとったものではないか、などと甚だぶしつけない質問をしたものです。「老子」はまったく読んでいないと聞いて信じられないような気がしたことを覚えていいる。そのとき色紙に、老子の言葉として博士が「On Becoming a Person」（一九六一）の中に引用しておられる「The way to do is to be.」という言葉を書いて頂いた。その色紙と、そのときにとらせて頂いた先生の写真が、今でも私の書斎の壁に掲げてあり、いつも私の方を向いて私を励ましてくれているような

気がする。

ちょうどこの次の年、昭和四一年から『ロージャズ全集』の刊行が始まるのです。そして七年かかって昭和四七年に全二三巻が完成した。もちろん、先生の全集はアメリカにもありませんし、世界で唯一のもので、今でも多くの人に求められております。

昭和四七（一九七二）年には、私が理事長をしておりました「日本カウンセリング協会」が主催した、いわゆる「アメリカ・ワークショップ」の中で、ロージャズ博士の「ラホーヤ・プログラム」の週末ワークショップに全員参加し、その翌日には、ラホーヤの先生の研究所（Center for the Studies of the Person: CSP）に全員でおしかけ、お話を聞かせて頂いた。Loneliness（寂しや）について話がかかり熱中したことを記憶している。ところがそのあとがたいへんで、写真、サイン攻めに合い、私が自分でサインをもらうのを遠慮したほどだったことも覚えている。博士は「こんなサイン攻めに合ったことがない。俳優にでもなったような気がする」とおっしゃっております。

ただか、ろくにほんとうに勉強もしていない私どものために、世界のロージャズが長い時間をとって、いやな顔ひとつせず、親しくつき合っただけだったことは、今思うと、ほ

んとうにもつたない思いがするばかりです。

昭和五八（一九八三）年に、人間関係研究会のご努力によって、ナタリーとともに来日されたときは、私は健康を害していて、直接にお会いすることができませんでした。代理のものをやって、二〇年前にロスアンゼルスのホテルで、ロージャズ博士とローガン氏との間に私が割り込んでいる写真を大きく伸ばして差し上げ、沖繩の紅型（びんがた）をおみやげにお贈りしました。思えばそれが最後のチャンスだったのですが――。

その少し後で、私の『ニュー・カウンセリング』（誠信書房、昭五八）を謹呈しましたところ、折り返し、「Freedom to Learn for the Eighties」（一九八三）を送って頂きました。なんとその本には私宛に“a valued colleague in humanistic education.”という言葉が書かれておりました。もつたないなくて、それを訳す気にはなれません。

これまで書き綴ってきましたことを振り返ってみますと、世界中に名の知れた、しかも国際的な活動に忙しく働いておられた先生から、あまりにも深いところと、あまりにも多くの時間やご配慮を頂いたことを、とてももつたないことと思うのです。ご恩の百万分の一でも、どんなかたちでもいいから、先生の心を配っておられたところにお返しし

なければ、という気持が、あらためて強く湧き起こってくるのを覚えます。



2. これからの日本のカウンセリングのた めに

今の日本の心理臨床の中では「折衷主義カウンセリング」を奉ずる人々が多いと聞いております。それに、折衷主義に対する批判が聞こえてこないのは、どうしたわけだろうかと私は不思議に思っております。そして、折衷主義者の言うところを聞くと、ロージャズも大事だが、「フンフン聞いているだけでは何も解決されない」というのが、ロージャズ理論に対する最大の批判のようです。この批判はまったくまちがっているのです。折衷主義は典型的な「技術主義」であり、そこには

なんのパスナリティ理論もないし、そのカウンセリング関係はきわめて「あいまい」で「非現実的」なものになります（ロロ・メイ著・拙訳『存在の発見』二四二頁）。

折衷主義にもとづいた学校カウンセラーや産業カウンセラーの養成では、カウンセラーになる人は、精神分析も、交流分析も、行動療法も、というぐあいに、一〇種類くらいの心理療法を勉強しなければならぬことになっていくようですが、そんなことはできるものではありません。そうした折衷主義を支えるパスナリティ理論は何もありません。それは、ただ単なる「技術」の寄せ集めにすぎないことに早く気づくべきだと思います。

折衷主義は、むかしから、「反・ロージャズ」であり、「非・ロージャズ」にすぎないと言われてきましたが、今も実体はそうであるように思われます。こうした現代の風潮に対して、いわゆる「ロージェリアン」をもって任ずる人々の主張は弱すぎるように思います。「ロージェリアン」たち自身が、ロージャズ理論に自信をもてなくなっているのでしょうか？ 私は、日本のカウンセリング界に向かって、もう一度ロージャズを見なおすようにすすめたいのです。とくに、教育の世界において、ロージャズの教育論は教育の本質に迫るものがあると思うのです。現に、NCHE (National Consortium for Humanizing Educati-

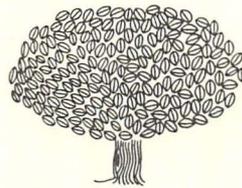
on)では、一七年間にわたり、アメリカの四二州と七つの外国で、ロージャズのカウンセラーの「三つの条件」を教師の条件として適用した大規模な研究を行っております(ロージャズ著・友田、伊東監訳『新・創造への教育』第二巻第一二章参照)。

わが国の教育界では、いまだに「カウンセリング・マインド」の必要が叫ばれておりますが、それは、ロージャズの「三つの条件」を教師が少しでも身につけることにほかならないのです。「カウンセリング・マインド」は、決して折衷主義などから出てくるものではありません。

私は、今、日本のカウンセリング界に、「ロージャズに帰れ」と叫びたい気持なのですが、それは、今の日本のカウンセリング界が、表面の賑やかさにもかかわらず、ひどく混乱していると思うからなのです。このままでは、「カウンセリング」が世間の信用を失いカウンセラーの質は急降下するばかりだと思っております。いや、すでにその方向に深く進んでしまっているのかもしれない。

そうはいいながら、私自身もかならずしもロージャズに立てこもるつもりではありません。私は、不遜にも「ニュー・カウンセリング」などというものを提唱しているのですが、それは、ずっともとを探っていけば、ロー

ジャズにたどりつくものなのです。「ニュー・カウンセリング」は「センサリー・アウェアネス」から出発したのですが、「センサリー・アウェアネス」という言葉は、すでにロージャズが一九五一年に、その「パースナリティ理論」の中に使っているものなのです(『ロージャズ全集』第八巻一二九頁の「命題一四」の原語がそうなのです)。



しかし、ロージャズは、「からだ」そのものをあまり重んじておりません。ある意味で心身二元論の中にあつたのは、歴史上やむをえなかつたかとも思います。ロージャズやジェンドリンも「からだ」にふれていないことはいのですが、それは、正確には「からだ」などところにとどまっております。「からだ」は「動く」ものだ、というところまで行っておりません。その限界を、お嬢さんのナタリーがさりと乗り越えているように私

は思うのです。ですからまた、ロージャズの大事にした“Fully Functioning Person”も私に言わせれば、“Totally Functioning Person”にならなければならなかったのです。

もうひとつ今私が注目しているのは、先程述べたロージャズのパースナリティ理論の中の「命題二」です。それは、こう述べております。——「有機体は、場に対して、その場が経験され知覚されるままのものに、反応する。この知覚の場は、個人にとっては実在(reality)である。」と。

この、いわば革命的な理論は、まだ十分に理解されていないように思うのです。それが革命的であるというのは、ビンスワンガーが「今日に至るまでのすべての心理学のガン」であると言った「主体と客体の分裂」を、さりげなく、乗り越えてみせているからなのです。それはまた、最近原子物理学者たちによって主張されている素粒子論にもピッタリと当てはまるように思うのです。——観察される対象は、観察者によって変化する、と。

—— Reductionism による究極の単一のサブスタンスは、なかったのです。「個人にとつての実在」は、実は科学の究極の実在でもあったのです。(昭和六二年五月十一日)

人生と学問の恩師・カール・ロジャーズ先生

柘植明子

Dec. 13, 1987

Dear Haru—

I hope this finds you in good health. Here is a report of my latest adventure. I send you much love.

Carl Rogers

こんな心うたれる御手書きメッセージのついた貴重なペーパー“Inside the World of the Soviet Professional by Carl Rogers”を頂戴したのが思いがけなくもロジャーズ先生からの最後の Personal letter となりました。そして今、先生からのこのメッセージを前にして、ことば言霊という日本古来の表現に新たな意味を、畏敬の念をもって思っております。

*

私にとって先生との出会いは一九五六年のシカゴ大学に始まりますが、特に一九六一年の御来日以来、カールとヘレン御夫妻との不思議な御縁によって展開された感動的な場面の数々が、新たな気付きと意味をもって、今

しきりに想い出されます。

その一つは、一九七一年ラ・ホイアでのことに遡ります。ロジャーズ先生が多年カウンセラー、心理治療者としての効果的な援助経験から生れた確信をもって、その両者の出会うの質に深く関係する要素として挙げられる三つの特徴の順序についてです。すなわち第一の要素として自己一致 (Congruence) 又は (Transparency)、第二に共感的理解 (Empathic understanding)、それに第三の個人に対する尊重 (Unconditional positive regard) という順序には先生の大事な意味が秘められています。しかし私のラ・ホイアの CSP (人間研究センター) での生活体験として、自分が不思議に open, transparent になれ、自分らしく日に新たに生きられる根底に

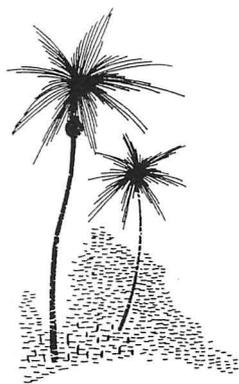
は、その民主主義社会の根本理念である無条件の人間尊重の念が息づいているからという思いがしっかりありました。そんな雰囲気の中でこそ共感的理解と自己一致の気が自然に醸し出され、交流し始める状況を自分の経験内容として先生にきいて頂きました。先生は終始柔和な表情で聴いてくださり、よく考えたこととそんな自分の思いを大事にしていくように応えてくださいました。

いつも言ったり、行動した後ではつきりすることなのですが、高名で臨床心理の権威であられるロジャーズ先生に全く素人の素朴な質問ができたということは、まさにさきの先生の三つの要素が渾然一体となってその場で生きて作用していたという実証に外ならないことを知りました。

また質の高い出会い経験からは新しい世界への道が啓かれるように思います。私はこの先生との交流経験から、そのもう一つ裏にある人間有機体への先生の深い信頼を感じました。その結果、有機体 (organism) とか有機体的経験 (organismic experience) という表現も、馴染みやすい記号ではなく、先生のいのちの通った言語であることを知りました。

いわば non-directive, client-centered それに person-centered approach となって人々をうるほしていく流れの生命の泉が見えた思いであります。

一九七一年にラ・ホイアで先生はもう一人の言葉の本に出会わしてくださいました。「人は人によりてのみ……されど……」―“Person to Person: The Problem of Being Human”の共著者Barry Stevensです。同年令のこのお二人は相ついで逝かれました。この本の扉に、And one clock stopped — and knew the meaning of time. (もろもろの便宜のために時を刻んでいる時計が機能を止める——生きて流れている時の意味が浮び上ってくる。)とあります。私はお二人の遺された言葉に啓発され、生きて流れている時の意味との出会いの日々であるように希っております。時機が熟したようです。



カール・ロジャーズとともに

—1983年5月 PCAワークショップの思い出—

(Memories of Carl in "Person—Centered Approach Workshop with Carl&Natalie Rogers" at
National Women's Education Center in JAPAN ; Apr 30~May 5, 1983)

● ワークショップのスタッフとともに



● with Staff members of the Workshop

「私たち人間関係研究会では、一九八三年五月、カール・ロジャーズ、ナタリー・ロジャーズ父娘を招き、国立婦人教育会館（埼玉県嵐山町）で、パーソン・センタード・アプローチ・ワークショップを開催しました。

ナタリーさんの父と娘の心情あふれる対話、「若い」についての淡々とした講話、「新しい科学とヒューマニスティック心理学」についての挑戦的な講演を通じて、そして6日間の生活を共にして、たえず「成長しつづける人」カール・ロジャーズの学問へのあくなき追求の姿勢と真摯で誠実な人柄を目の当たりに感じることができました。

感謝と哀悼の意をこめてありし日のカールの面影をしのびたいと思います。

● スタッフを感じとろうとするロジャーズ



● He was trying to feel……

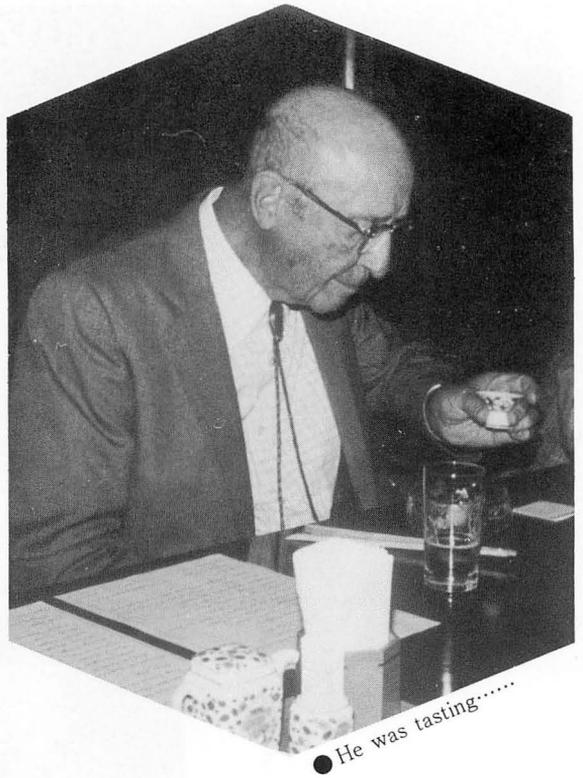
● 信念を説くロジャーズ



● He was persuading……

● He was talking out……



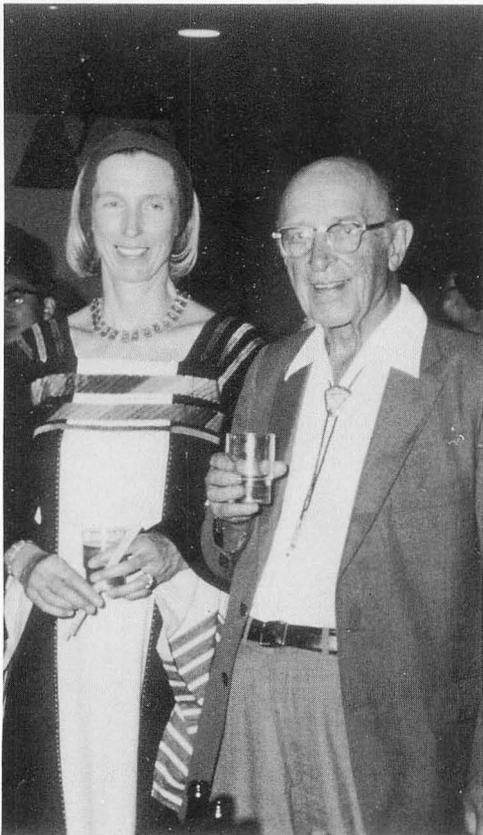


● He was tasting……

● 日本酒を味わうロジャーズ

「私は、自分の言いたい重要なポイントのほとんどはもう言い尽くしたと考えています。ただ、私には、もっと学びたいことが沢山あるし、未知の土地を色々訪問してみたい。…」
 「そして、靴をはいたまま死にたい、いつまでも活動的に旅を続けたいという思いが、ますます強くなりました。死の時まで、前進を止めたくないという欲求です。」

● パーティでくつろぐロジャーズ



● He was relaxed……

「たとえ障害があっても、自分の能力の範囲でできることが何かはあるのだと考えました。私が楽しく感じるのは、ごく自然に、これができないのなら、こんなことができるな、という風に考え始める点です。私は自分の障害と取り組むのが好きです。」

「私どもが目指しているのは、個人が全人格者としての自分を発見し、自分のアイデンティティを確立できるようにその場を準備し、促進してゆくところにあります。」

「自分の可能性を開発し、自主的に考え、自己指示的に行動するような人間を形成していくことこそ、一連の非人間的な悪循環の鎖を断ち切ることになると思います。」



● 参加者の声を聴くロジャーズ

● He was listening to……

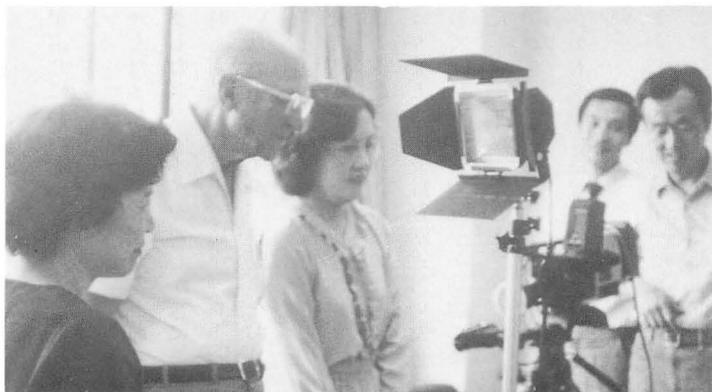


● He was delighted……

● 贈り物に微笑むロジャーズ

● He was watching……

● 自分のインタビュー・ビデオを
観るロジャーズ



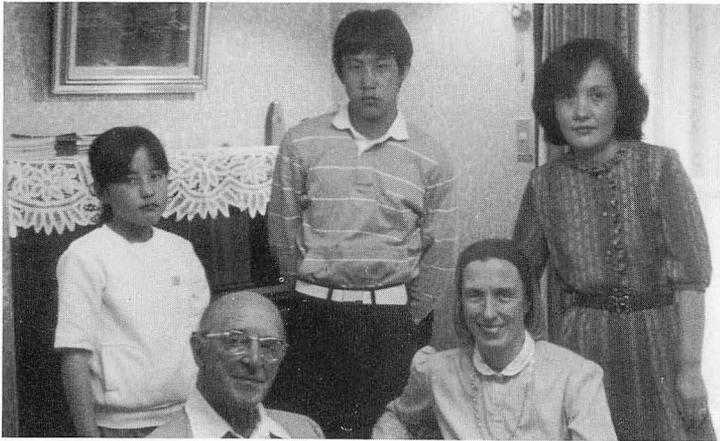
構成 渡辺 忠

※引用は「カール・ロジャーズとともに」(創元社 1986)より

●カールの日本散策スナップ

Some snapshots of Carl's trip in Japan after the workshop, May 8th~12th,1983.

ロジャーズ・ワークショップが成
功したおかげで、ほんの数日ではあ
りましたが、帰国前に関西の春を楽
しんでいただくことができました。



▲ With the Hatases

(1) 十四年ぶりにわが家へ

赤ちゃんだった息子が、ご覧のとおり
になりました。ラ・ホイヤのわが家にこ
られた時も、随分珍しそうにキョロキョ
ロしていたカールですが、自動車をおり
た時から少年のような好奇心をチラリと
のぞかせて、いそいそとわが家へ。狭い
玄関では、夫婦二人がかりでカールの靴
をひっぱりました。受験期が近付いた息
子ですので、日本の受験戦争が話題にな
りました。カールは、たとえランクが下
の大学になったとしても、自分を大切に
したほうが未来が有意義になるとのお考
えでした。

ラ・ホイヤでは、私が作った散らしず
しにまじったシイタケを見て、ギョッとす

島瀬直子

るヘレンさんをしりめにも、何でもバクバクたべてくれたカール。こんどは忙しすぎて、手料理をさしあげられなかったのが心残りです。「日本の普通の家に行ってみよう。立派な家には招かれたことあるんだけど。」カールがそう語るのを何度も聞いたことがあります。普通の家のわが家をどうぞご覧になったのでしょうか。とても、喜んでくださって、あとからの手紙にもこのことが触れられていました。

(2) 古都の一日を、木村易さんと

窓の外がそろそろ暗くなりかけている。ためらいながらも差し出した色紙に、胸

What I am is good enough, if I can only be it, openly.

Carl R. Rogers

Discovering the Creative Connection

Natalie Rogers

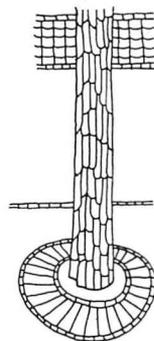


の万年筆を抜いて、彼が書いてくれる。ナタリーも。
『カールとナタリー。僕が会ったあなた達、あるがままの。What you are is good enough。僕も自分であることが、どうやらできそうに思えてきた。それは十分に良いことだ。』
木村 易

▲ At Ryoangi temple in Kyoto

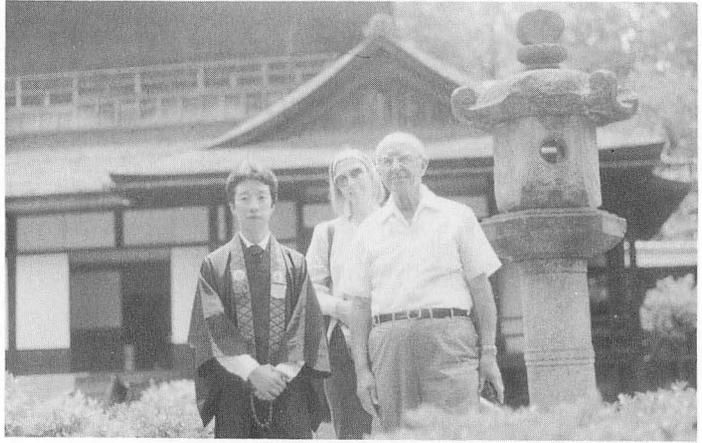
(3) 国宝を静寂のなかで満喫

西本願寺の御好意で、非公開の国宝建造物飛雲閣を案内してもらった。若いお坊さんの説明を聞きながら、ひとりの観光客もいない静寂さの中で、日本の美を心ゆくまで味わったカールとナタリー。カールは、襖絵の前では、関心して熱心に鑑賞。そういえば、ラ・ホイヤのロジャーズ邸には、立派なびょうぶが飾られていた。日本の芸術は、カールが心から親しんできたもののように思われた。



京都での宿舎となった東急ホテルは西本願寺の北側に位置し、古い京都の町並みが見下ろせる。部屋から眺められる瓦屋根が続く京都のたたずまいが、何とも心が落ち着くと語っておられた。私達の文化の味わいを指摘されたように感じて、嬉しかった。

▼ Young buddist monk explaining the beauty of the head temple (Nishihongani, Kyoto)



(4) 念願の旅館に泊まった！

日本の旅館に泊ってみたいというのが、こんどカールから出された少ない希望のひとつだった。京都で捜してみたのだが、安心して泊まってもらえる有名旅館からは、一泊一名四万円といわれた。それではあきらめるしかなかった。そこで瀬戸内への旅の途中、姫路でいい旅館



を見つけた。カールの喜びようは、見ているだけでこちらも嬉しくなってしまうほどだった。サンキューしか言えない女中さん達も、カールの人柄にひかれたのが大喜びで大歓迎してくれた。一緒に泊まった夫が、「ちょっと、やり過ぎじゃないかなー」と思うほど、かいがいしくカールのお世話をしてくれたそうだし、寝る時がひと騒ぎ。カールの夢が実現して、いよいよ日本の部屋で日本のふとんに寝ることになったのだが、長さが足りないと。女中さん達が大騒ぎをして、もうひと組のふとんを足して、やっと休むことができた。さぞ、いい夢をみたことでしょう。

▲ What did he dream?



▲ "I love old Japanese inns"



▲ Enjoying dinner at a Japanese inn

(5)日本の城はヨーロッパの城より立派だね

小高い丘にそびえる姫路城は、日本の城といえるだろう。門から天主閣まで白壁をながめながら曲がりくねった道はかなり歩かねばならない。足腰に衰えの見られるカールは、一歩一歩本当に楽しんでお城見物。

京都から私がかけたついたら、ちょうど見物を終えて帰ってきたところだった。私の顔を見るなり、「ヨーロッパの人がこのお城を見たら、恥しくなるだろうよ」という意味のことをおっしゃった。



▲ At Himeji Castle

新緑に輝く姫路城は、本当に心にしみる美しさだった。

(6)Inland Seaに小舟を浮かべて

陸地の間に入り組んだ海というのは、神秘的なひびきでも持つのだろうか。日本を訪れてみたい所はないかとの質問に、*"Inland Sea*に舟を浮かべてみたい"という返事がきた。そこで姫路から赤穂岬までドライブして、瀬戸内の春をおもいっきり見てもらう計画をたてた。赤穂への道は変化に富んでいる。いくつも漁村を通り、右に左に景色が変わり、青いのかな海に島じまが見えて、それは

それは美しい。室津という江戸時代に栄えた港町などは、坂の上から眺めると中世の絵巻物そのままのたたずまいだった。



「日本の田舎を見てみたい」というカールの願いが、期せずして同時に満たせるドライブとなった。学生時代にはじめて日本にきた時の話をしながら、日本の田舎が美しく整い経済的に豊かになっていることを心から喜んで下さった。

赤穂岬の料理旅館は、二方に海が見渡せる素晴らしい部屋を用意してくれていた。小豆島がとりわけ美しく眺められ、カールもナタリーも心からくつろぎのひと時をすごした。

あらかじめ頼んでおいた小舟にのり、「とうとう海へ」。「私達さま、Inland Seaにのってます。」

私達が一時間ほど遊んでいるうちに潮がひいてしまい、もどってきたら船着場は見上げる高さになっていて、思わずゾツとした。どっしり太ったカールを船着場に押し上げるのは、大変な騒ぎだった。やっと無事に船着場によじのぼり、ホツとしていたら、気のいい船頭さんが写真をとってくれた。



(7) 「父さん、危ない！」

赤穂は、日本中に有名な町。切腹の話などをしながら、わずかに残るお城の石垣を見物しました。カールが切腹についてどんな意見を持っているのか聞くの

を忘れたのは残念です。

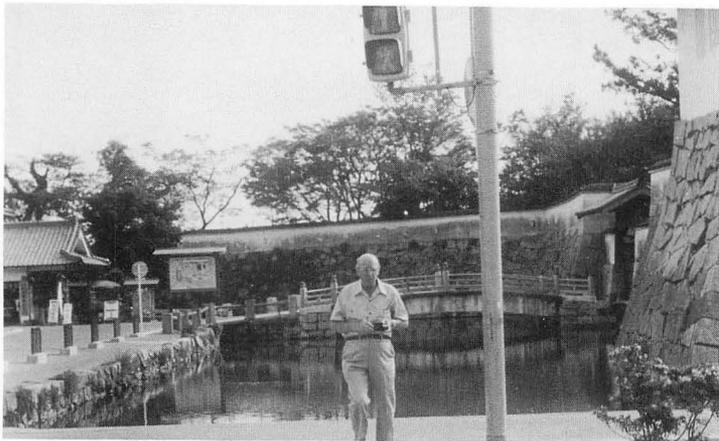
この時、カールは写真をとろうと赤信号に気づかず渡ったのです。

「父さん、危ない！ここは、アメリカではないのよ！」

ナタリーが叫びました。私達は思わず吹き出しました。

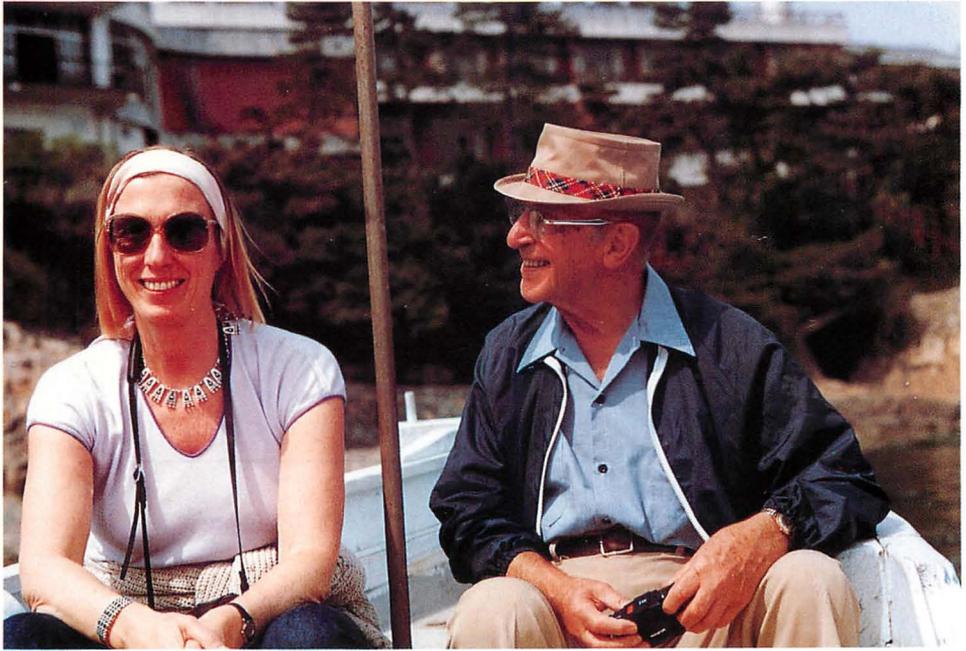
▲ After a boat ride in the Inland Sea
カールが元気なうちに、経済的に復興して少し余裕が出てきた私達の国を見て頂きたい。カールの考え方が私達にとって力になったことをお知らせしたい。私達の感謝の気持ちを知っていただきたい。そう思い立って計画したワークシヨップでしたが、その後カールは益々お元気で、南アフリカ、ヨーロッパ、南米と、飛び回っておられました。そんなカールの姿を聞くうちに、いつしか私は、カールを不死身のように思いはじめたようです。また何回でも会えるような気になっていたのです。そこへカリフォルニアからの電報。

随分精神的打撃を受けましたが、カールと知り合えたことは、私の人生での最も素晴らしい出来事だったと思い、天国のカールに感謝の気持ちを伝えたいと思うこのごろです。



◀ “It’s red, Carl!”
In front of Akoh Castle, a famous historic spot

はたせ なおこ
●滋賀大学保健管理センター助教



▲ "Now, we are on the Inland Sea!"

わが道を与えられて

大須賀 発 蔵

悲しいおしらせを受けて、数ヶ月の時間が流れました。いま私の「生」に決定的な方向を与えて去っていかれたロジャーズ先生を胸にえがくとき、一九六四年六月二十五日、ようやく念願が叶って先生をお尋ねした日を思い出すのです。

ロスアンジェルスから車でラホイヤに向かった私たちは途中で道に迷い、西部行動科学研究所（当時はまだCSPはありませんでした）に着いたときは大変約束の時間に遅れていました。その間、どれ程気をもんだか知れませんでした。先生はその私たちの緊張や不安を「道に迷って大変でしたね」と、あ

の柔らかな笑顔で、すっと受容して下さったのです。その時の救われた思いが、カウンセリングを私の生涯の課題に据えてくれたのです。

先生は二階の部屋にコーヒーカップの数まで私たちに合わせてまわって下さったのですが、そのときのことを地方紙「いはらぎ」に次のように掲載したことでした。

「……私たちは明るい午後のひとときを産業社会における人間理解の問題について語り合った。ロジャーズ博士は『現代の社会には一方に立派な職制があり、その立場にある人たちはみな成功した人たちです。しかし近ずいてみるとその人たちの心には個人的な悩み

やさみしさが存在しており、また本当の自分になることを恐れています。ちょうど仮面をかぶって芝居をしている人と本当の彼とが違っていることに似た感情を味わっています。現代人にとって真の自己を見出し、さらに他の人たちを理解し、その距離を縮めようとする経験は、思想的にも深いものです』と喋ってカウンセリングの重要性を話された。心のみたされた私たちは改めてラホイヤの海岸を散策した。別荘地帯の美しい家並み、その前面には遥か鹿島灘に続く太平洋が、静かな波を寄せていた。」

一九七一年ラホイヤ・プログラムに参加したときには、さらに私の生き方に大きな方向が与えられました。それはコミュニティ・ミーティングの中におけるロジャーズ先生のお話でした。

「ここに来ているみなさんの中には、私と同じようになろうとしている人がいます。しかしそれはちがいます。みなさんが、それぞれ独自のアプローチを創造してくれることを、私は心から望んでいるのです。それでこそみ

んが一つになるのです。」以前から私は仏教とカウンセリングの思想が、根源のところでは一つであることを強く感じていましたが、二つの領域を一緒にすることは、どこかいけないことのように思っておりました。あまりにも異端なこととして否定されるような不安があったのです。しかし、ロジャーズ先生のお話から、むしろ東洋の智慧とカウンセリングの統合を私の独自の課題としていいんだ、それこそロジャーズのフィロソフィーを生きることなんだと確信できたとき、私の内面に大きなエネルギーが湧出したのです。

それ以来私は華厳や曼荼羅の思想とカウンセリングやエンカウンター・グループの統合ないし融合を目ざし、そこにささやかながら自分のアプローチを創る努力をしてきたのでした。思えばロジャーズ先生のエネルギーをいただいていた私でした。

一九八三年、ロジャーズ先生来日の時のご講演はさらに大きな励ましを与えてくれました。「ニューサイエンスとカウンセリング」の関係を話された先生の姿には、新しい課題に興味を示す少年のような純粋な情熱が感じられました。そこでは宇宙の大自然と個人の生命の同調ないし統合こそ、これからの心理臨床の目ざす新しい領域になることを示唆するものでした。

私はそれをお聞きしながら、宇宙のいのちと個人のいのちを本来平等なものとし、その相即円融を境地としてきた華厳をはじめ東洋思想が、ようやく新しい時代の中に意義を担うときが来たことを感じました。

「無条件の受容」というかわりは、そのまま東洋思想の根底に流れている「あるがまま」や「自然法爾」の思想と一つですが、心理臨床のあり方も個人と個人のかかわりから、それに加えて、個人と宇宙の次元を求める時代になってきたのだと思います。そこを開いてロジャーズ先生は瞬時の間に

カール・R・ロジャーズ博士を偲ぶ

— 4つのエピソード —

村山正治

宇宙そのものに回帰されたのです。巨大な光芒を放った壮絶な終焉でしたが、光はそのままだ、いつの世にも変わることはない人間への信頼を直指して消えることはないでしょう。私はロジャーズ先生からいただいたエネルギーをさらに燃やしつつけることによって、先生との尊い出会いを莊嚴しご恩に報いたいと念願しております。ロジャーズ先生どうぞ宇宙一杯のいのちとなって私たちを見守って下さい。

おおすが はつぞら
・英城県商工経済会人間関係研究所所長

〈はじめに〉

ロジャーズ博士には一九六一年夏、京都大学で初めておめにかかった。以後、一九八七年一月二一日付の手紙までの二五年間、接触

を持ってきた。その間日本で、サンディエゴで、英国のノリッチで、アリゾナのフェニックスで、ロサンゼルスで、カナダのモントリオールでおめにかかった。学会の特別講演者として、ワークショップのファシリテーター、書齋で、人間研究センターのスタッフミー

ディングで、サイコセラピイのデモンストレーションで……様々な場面でのロジャーズ博士に接する機会を持った。

ここでは、ロジャーズ博士と接触して思い出に残っている事柄のうち4つのエピソードを書いてみたい。

〈Responsibleな人〉

こちらから発信した手紙にしろ、言葉にしろ、メモにしろ、必ず応答がかえってくる。

これにはほとほと感心している。Responsibilityとは責任という言葉だが、語源は知らない。しかし、ロジャーズさんと接触していること、Response→反応でできるability→能力が責任だということを教えられたように思う。反応できないなくなったときに責任を持ってなくなったときだということが私の日常生活からよくわかるからでもある。

人間研究センターでは、当時毎水曜日の午後にはスタッフミーティングが行われていた。ロジャーズ博士は必ず空の大きなカバンを持ってきて、一週間分たまった世界中からの手紙などの通信物を大事に入れて持ち帰っていた。反応のときも (Responsible) ためには、もちろん、有能な秘書を抱えていた。それにしても、あのぼう大な手紙類に返信を書くことを考えただけでも私などは気が遠くな

りそうである。米国にいる関係者に同時に郵便物を発送すると、たいてい一番先に返信がくるのがロジャーズ先生である。

自由な雰囲気強調し、相手を自由にさせたが、自分にはきびしい、几帳面な一面を持つっておられたように思う。

〈共感能力の豊かな人〉

〈映画〉グロリアと三人のセラピストをみた方も多いと思うから今更、ロジャーズ先生が共感能力が豊かなことをあげる必要はないかも知れない。しかし、サイコセラピストとして、共感を治療理論の中核にすえるだけあって、さすがと思わせる場面に何度も出会った。

一つは一九六一年京都大学で行われたセミナーの時であった。われわれ大学院生は京大教養部のある教室でロジャーズ先生の講義の会場準備をしていた。大教室だったのでマイクが必要だった。通訳のローガン博士とロジャーズ博士が黒板の前で何やら話していた。われわれがマイクの調整をしはじめると、すぐにロジャーズ先生がマイクを「コンコンコン」とたたいてくれるではありませんか。何気ないことのようにだが、なかなかできないことである。また、京都ホテルに滞在していたロジャーズ先生に連絡をとる必要が出てきた。

会話能力に全く自信のなかった私は、ローガンさんかだれかが出てくると思って電話をかけたところ、ロジャーズ先生が直接電話に出られた。実にやわらかく人をおちつかせる声であったことを覚えている。とにかく何とか単語をあやつって、大阪講演の打ち合わせの約束をとりつけたのを思い出す。

後年、様々なセラピストに会う機会を持ったが、私の中でひとつの仮説が生まれてきていた。それは私の拙ない英語で話して、私が理解されたと感じる人は有能な実践家ではないかというものである。たいへん手前勝手な仮定だが外国のセラピストに会ったときの一つの目安にしている。

一九八六年一月八日、私はサンディエゴの人間研究センターでロジャーズ博士と話していた。ある雑誌の編集委員に日本人がだれもいないのは、無視された感じがしているし、日本人を入れてほしいと提案したところ、「それは良い考えだ」と賛成してくれた。メモを取り出して私があげた名前を書いておられて、「ではショージ、君もね」といわれてびっくりしてしまった。実は内心、私も自分の名前をあげたい気持があったが、日本人的気恥かしさがあってあげなかった。ところが私のいわばHidden Messageをちゃんと感じとられていたわけである。自分の心を「見抜かれた」という感じがまったくなく、自然に

いい出しそびれていた私の気持ちを受けとめ、言語化してくれた感じなのである。こうした非言語レベルへの反応はグループや面接のデモンストレーションにもよくみられたものである。

へパイオニア・あるいは

静かな革命家

ロジャーズ先生が、カウンセリングの領域でパイオニアであることはつとに知られている。面接場面を録音したり、映画にとったり、リサーチを行ったり……彼が、最初であるといわれている。ここで、それを書こうとは思わない。他書にゆずりたい。私には、一九七二年の人間研究センターでのことが印象に残っている。

当時、人間研究センターはエンカウンターグループのプロジェクトをまとめていたが、その一つにロサンゼルスにあるイマキュレートハートカレッジの教育の組織改革があった。研究所のスタッフやそのプロジェクトにかかわっていた人達が口々に「あのプロジェクトは失敗だ。大学はエンカウンターをやめさせた」といっているのを聞いた。これはひとつロジャーズ先生にたずねてみたいと思い、「みんなが失敗だと話しているが、先生はどう思われますか」とたずねた。そのときの彼

の応答は「自分はそうは思っていない。君が実際に見てきたのなら、その人を紹介してあげる。」と悠々とした態度だった。特別に弁解する様子もなかった。

あとで、ロジャーズ先生に紹介された人物をこの大学にたずねたが、実のところ、私は失敗だったかどうかよくわからなかった。しかし、このときの周囲の人達とロジャーズ先生の態度のちがいがとても印象に残った。

後年、ロジャーズ先生のある文章をよんでこのちがいがわかり、なるほどと思った。ロジャーズ先生はパイオニアであり、冒険をする。冒険に失敗はつきものである。しかし、「私が新しい試みを好む一番大きな理由は、それで成功を納めようと、失敗しようと、試みることによって学びとれると気づいた事です」とある。ここにロジャーズ先生のパイオニア・スピリットの核心をみた思いがしました。静かな革命家あるいはパイオニアとして持っていた一種の楽観性はこの学びとる態度に根ざしたものであろう。

〈最初と終わりの

はじめのできる人〉

私ども家族がサンディエゴの人間研究センターに留学したのは一九七二年四月であった。はじめてセンターを訪問したときのことを思

い出す。驚いたことに、ブルース・メドウ博士、マリア・ボウエン博士とロジャーズ博士がきちんと背広をきこんだ正装で私どもを迎えてくれたのである。これにはびっくりしたが、たいへん感激した。以後一年半近く滞在していたが、ロジャーズ先生の正装した姿をみる機会はなかった。

私どもは一九七三年九月に帰国することになった。わが家といっても、私と入れちがいに留学してきた東山氏の新しいアパートでパーティをやることになった。このときは、ロジャーズ先生が率先して研究所のスタッフを引っ張ってきてくれて、たいへんにぎやかな会になった。(私はといえればカナダから帰ってくる航空便がおくれて遅刻してしまったのであるが。)

〈おわりに〉

昨年、来日して阪大で講演したマサリック教授はHumanistic Psychologyのスーパー・スターの一人にロジャーズをあげて、“fine person”といった。人格者とも訳すべきなのだろう。しかし、世の中で人格者でなおかつあれだけ創造的な人物は稀有なものではないだろうか。誠に惜しい人物が世を去っていった。

むらやま しょうじ
九州大学教育学部教授

カールおじさん

多田治夫

一、戦うカール

私が初めてロジャース博士を見かけたのは、もう四半世紀も前のことである。一九六一年にニューヨークで開催されたアメリカ心理学会に出席していた私は、ロジャース博士が来談者中心法による面接のロールプレイを見せてくれるプログラムがあるというので、大勢の弥次馬の一人として遠くからその面接の様を眺めていた。すぐ側には、ちょうどそのころスタンフォードに留学中の佐治守夫さんがいた。

「あなたの非指示的方法は……」と皮肉たっぷりな批判的な意見を述べた精神分析医に対し、ロジャース博士が痛烈な逆批判を加えたことを思い出す。頭こそ禿げていたが、まだ細身だったころのカールの第一印象は

〈戦闘的なカール〉であった。

二、ロジャース博士

それから約十年後の一九七二年、研修旅行の途中に、私はラホエアの人間研究センターにロジャース博士を訪ねていた。私のくどくどした質問に一つ一つ丁寧に答えながら、ロジャース博士は彼の創造的な研究と言われるものが実は先輩たちの歩みをほんの一步進めたに過ぎないことを語ってくれた。私がオートー・ランクの名前を挙げた時には、身を乗り出して「ニューヨーク時代に私はランクに夢中でした」と懐かしげな面持ちであった。ロジャース自身の独創的な研究手法の積み上げの背後にある〈研究者ロジャース博士〉の一面に触れた思いがした。

三、カールおじさん

それからさらに六年後の一九七八年には、人間研究センターのメンバーとして、色々な面で接触することができた。ラホエアの中心部にあるスーパー「ジョンナサン」は、私のいたアパートに近く、またロジャース先生の行きつけの店でもあったから、よく一緒に買物をした。こんな時の印象は〈カールおじさん〉と呼ぶのがびびったりなのだが、センターのスタッフ・ミーティングで平和問題を論じたときには〈平和のために戦うカール〉の顔が、そして、研究計画を話し合うときには〈ロジャース博士〉の顔が、それぞれ垣間みられたものである。

四、大きなカール

「群盲象を撫でる」のように、私は大きな大きなカールのごくごく一部に触れただけに過ぎないと思う。有難いことに、カールは書物やテープを通して、今も、そしてこれから、我々に様々の顔を見せながら多くを語りかけ、語り続けてくれることであらう。

ただ はるお
● 金沢大学教養部教授

ロジャース先生の思いで

東山 紘久

がなされたのである。

ロジャース先生はほとんどの場合、皆の意見を聞いておられた。時々、御自分の意見もだされたが、それにはたいして、所員は他の人の場合と同じように反論を加えたり、賛成したりしていたのが印象的であった。ロジャース先生の鶴の一声で決まることはなかった。結局、この議案はその時は持ち越しになった。この後数回にわたり議論して決着をみたようであった。

民主的な決め方は時間がかかり、能率が良いとはいえないが、民主的に研究所を運営していくことの大切さを教えてくれたミーティングであった。しかし、何事も二つよいことはなく、この議題が何回もかけられるに従って、スタッフミーティングに参加するメンバーが減っていったことである。特に、値上げで痛痒を感じない人の参加が減ったように思えた。

ロジャース先生は自分の事は自分で敢然と決意される人である。それでいて、皆に関わる問題になると自然に結論が出るまで、実に辛抱強く皆の意見を聞いておられた。私にはこれがロジャースのカウンセリングに流れる大切な事の一つであるように思える。なかなかできないことなのではあるが。

ロジャース先生にはじめてお会いしたのは、ラホイアの C. S. P. (Center for Studies of the Person) でのスタッフミーティングの席であった。この時のテーマは、秘書やその他の人件費の値上がりにもなうスタッフフィーの値上げ問題であった。ロジャース研究所では、秘書や清掃等の実務をする人以外のいわゆる研究所員は給料を貰うのではなく、逆に研究所を維持するための費用を払うのである。だから研究所員は自らの生活費は研究所或いは別の場所で得なければならぬ。その時の研究所員は四十数名登録されていたが、生活基盤・収入・社会的地位に大きな隔たりがあった。例えば、一夏で二千万円稼いだり、一回の講演料が三十万円を超えるスタッフがいるかと思うと、月七〜八万円の稼ぎで、生活するのがやっとというような所員がいた。この時の値上げ幅は五\$ (当時のお金で千五

百円見当) だったが、議論が白熱したのは、このような生活実体の差があったからである。皆が給料を貰うのではなく、平等に出しているのは、所員としての権利・義務を各自に完全に平等に保証することになる。これも議論が活発になる要素であった。しかし、一時間間に渡って議論が続くと、メンバーに議論に対する飽きが見られてきた。特に、収入の多い所員にとっては五\$の値上げなど痛くも痒くもなく、かえって時間の方がもったいないと感じているようであった。そこで、収入に応じて費用に格差をつける提案がなされたが、これはとりもなおさず、所員の何かに差をつけることにつながると反対され潰れてしまった。ワークショップのフィーでは、収入による差を認めているではないか等の反論が試みられたが、ワークショップと研究所員のフィーは根本的に違うところがある等の反論

ひがしやま ひろひさ
大阪教育大学助教授

ロジャーズさんと私

小野 修

『問題児の治療』（ロジャーズ全集第巻）の翻訳の許可を求めたのが、私とロジャーズさんの接触の始まりである。

私の翻訳能力を証明する二人の証明書を要求された。今にして思えば、自分の無謀さに冷汗が出る。ロジャーズさんの原点から取り付いていきたい、それを同業の仲間達に伝えたいという願いだけでつっ走れた、若さの特権だったのだろうか。その後二年間睡眠時間を切りつめての苦闘が続いた。翻訳は、私にとってはよく読むという意味であった（それは、今でもそう変わらないが）。出版社が決まらず困っていたとき、丁度全集の企画が決まったのは、幸運であった。

ロジャーズさんの出発点であった児童相談所で仕事を続けているのも、そうした御縁かもしれない。

その後、昭和四〇年研修訪米の帰途サン・

ジェゴにロジャーズさんを訪問した。予定より二日早い到着であったにもかかわらず、ホテルまで迎えに来て下さり、自宅で用意された署名入りの著書を頂いた。

その時、膝乗り出して聞かれたことは、『何故、自分（の著作）が日本で“popular”なのか？』ということであった。全くお答えできなくて申しわけなかった。四年前来日されたワークショップでお会いしたときにも、私はそのことを話せなかった。既にどなたかが、そのことに答えてくれていて、ロジャーズさんのお目に触れるか、お聞き下さっていただければ幸である。もしそうでなければ、この特集号にどなたかが触れて頂いていけば有難い。そうでなければ、私は自分の能力をはるかに超えた宿題をロジャーズさんから出されたままになってしまふからである。どなたか、是非お助け頂きたい。

私がロジャーズさんからもらったのは、何

であろうか？『治療という枠組で考える。』というの、私の仕事のなかに、ずっと生きてきたように思う。

『実践家である。』というのは、実践を離れない、実践から理論化ということであろうと考えると、やはり私の行き方になったようである。

これは、『経験の重視』にもつながろう。この傾向は私自身のなかに早くからあったようである。『男が女を好きになる。』ことは理解できても、『女が男を好きになる。』ことを理解できない（かった？）ために、私の青春は華やかになれなかった。しかし、このことは私のこれまでの、そうしてこれからの、仕事にとって、大きな貢献をしてくれそうである。

ロジャーズさんは、私に『子供との仕事をしているのであれば、J・タフトの本を読むように。』と、お勧め下さった。翻訳してよく読んではいないが、『時間を治療の武器とする。』、『そのためには、治療者自身が時間を大切に生きていなければいけない。』ということ、私の生き方をかなり規定してきた。これは、今後も引続き私の関心領域となるであらう。

多くのことを、有難うございました。安らかに、ロジャーズさん。

おの おさむ

● 香川県児童相談所長

ロジャーズの訃を聞いて

木村 易

ロジャーズの死の原因になった骨折について、畠瀬さんからは最初「転んで尾てい骨を折った」と聞いたような気がする。間もなく送られてきた米国からの報せには Carl fell and broke his hip. とあった。hip を break するとはどういうことなのだろうか。骨折だとすると hip とは正確にはどこの骨のことを言うのだろうか。ロジャーズの死についてそのあと人から尋ねられ答えようとしてよく分からなくなつた。手近の小学館の英和中辞典で hip を引くと、「1. 臀部、お尻、ヒップ、(日本語の「尻」と違つて横への隆起の一方を指す)、腰、↓ waist (図) 2. hip joint 股関節」とあつた。そこで waist の図を参照すると、ぼくらのいわゆるお尻(後ろへの膨らみ)は buttock で、hip というのはむしろからだの脇で腰の

くびれの下に横に膨らんでいる辺りになっている。念のため大学の同僚の英人教師にたずねたところ、この辺りだと腰の横から腿にかけての場所に手を当てた。結局腿の上端や股関節を含めた腰周辺の骨折ととればよさそうである。

骨折箇所にぼくが妙にこだわつたのは、ロジャーズの死因を正確に知りたいたいという気持ちと同時に、尻の骨を折つてではどうも威厳に欠けるといった意識が潜んでいたようだ。足の弱つた八十五歳の老人が、転んで尻の骨を折つて死亡というのは、正月の新聞によく見掛ける陳腐な見出し、「老人また餅を喉に詰まらせて死亡」のようでもうにも滑稽で悲しい。再発する癌に対して繰り返し手術をうけ、頭の働きが鈍るからと鎮痛剤を用いず

に死の直前まで分析の仕事をしつづけたというフロイトの死にざまは壮絶で凄惨すぎるが、南アや北アイルランドへの旅行の途次、面接とかグループの最中、あるいは書斎で論文を執筆中にとか、そんなロジャーズの死、かれの生涯にふさわしい幕切れをひよつとするとぼくは予想していたのかも知れない。

*

尻が尻ではないと確かめてなにやらほつとして、「ロジャーズは倒れて腰の骨を折つて云々」とぼくはひとに語つた。考えてみれば腰の骨折と尻の骨折とでさしたる違いはありはしない。「ロジャーズは倒れて尻の骨を折つて死んだ。」としても、それが事実ならむしろ、権威化されたり偶像視されることを嫌つたロジャーズらしい死に方と言えるかも知れない。「長い苦しい病気で死ぬのは恐ろしく思われます。老衰や脳溢血による半身不随を考えると、自分の好みで言うところ、威厳を持って死ねるうちに思わずに死にたいのです。」とは語っているが、彼は決して倒れたり転ぶことを恐れて冒険をためらう人ではなかつた。

倒れて骨折したというこの知らせから、いまぼくはむしろ、倒れるその直前まで「靴をはいて」歩きつづけ前進していたロジャーズ

の姿を鮮明に思い描いている。四年前の日本でのワークショップで、「靴をはいたまま死にたい、いつまでも活動的に旅を続けたい」という思いが、ますます強くなりました。死の時まで、前進を止めたくないという欲求です。」と語った望みどおりに。

*

一足のはきふるした平凡なゴム底の白いズック靴がいまほくの眼に浮かんでいる。軽くて歩き易く、老人にとって脱いだりはいたりし易いタイプの靴。あれは龍安寺の石庭を見たあとだったろうか、玄関の簀の子の上で少しおぼつかない足つきだからだのバランスをとって慎重に靴をはこうとしているロジャーズを待つ間、自然その靴にほくの眼がいった。もしかするとあの靴はあれから南アフリカや中南米の土を踏んだのかも知れないなといまとなって思う。

英語には人のあとをつぐことを、ひとの靴に足を踏み入れるという言い回しがあるらしい。だれが残されたロジャーズの靴に足を踏み入れ、彼の残した道に向かって歩みつづけらるのだろうか。

きむら やすし
愛知大学文学部助教授

想うこと

カール・ロジャーズに乗って頂くことがあるかも知れぬという思いで、車を買って換え、まだ数千キロの走行距離の時、新車で成田へロジャーズ父娘をお迎えに行った。成田からホテルオークラ、ホテルオークラから嵐山の会場まで、それまで誰も坐っていない真白なカバールの後部座席にお二人をお乗せし、全身これ神経になってお送りした。慎重な運転にカールは、Good driverと云って下すった。うれしかった。

ホテルオークラの次の間付の立派な部屋にカールを案内した時、ホテルのお世話一切を引受けられた中川紀子さんからの美しい生花が鏡の前でwelcomeして呉れていたのもうれしいことだった。さすが中川さん、気配りが違うと思った。

ラ・ホヤプログラムに三回程度参加した後、一九七八年秋、三ヶ月ばかり外国を旅行する

機会に恵まれ、サンディエゴのCSP (Center for Studies of the Person) に2週間程お邪魔したことがあった。

カールに面会を求める程の人間ではないので、CSPに毎日のように行きながら、集会所で一人資料や本を読んだり、話し掛けて下さる方と下手な英語で話をしたりしていた。週一回のスタッフミーティングには出させてもらっていた。色々と判らないことは、それ迄に来日されたことのある、アンドレ・オーさんのお世話になった。

集会所に一人何かを読んでいた時、カールも一人で部屋に入ってきて来て、私が居るのに気付くと、悪いことをしたような恥ずかしそうな顔をして、そっと部屋を出て行かれたことがあった。家主はカールの方なのに、と恐縮してしまった。八〇才に手の届く人の青年のようなら若々しい恥じらいに新鮮な薫りを感じた。

見藤 隆子

スタッフミーティングでのカールが、見事に一メンバーであるのも感銘深いことだった。そんなある日、ヒョッコリと佐治守夫先生がCSPに現われ、カールと面談されるというので、私も陪席させて頂いた。この時のことは、きつと佐治先生が書かれることと思う。

この頃、アンドレ・オウさんが、サンディエゴからハワイへ居を移されるということがあった。そのためさよならパーティーをカール・ロジャーズの家でするというので、私も加えて下すった。岡の上のサンディエゴ湾が一望できるしよしゃなお宅にお邪魔した。

玄関を入ると壁掛け、扇、屏風など趣味の良い日本製品が飾られていて、日本趣味の方かと思っただが、いずれもお土産に頂いたものばかりだと云われた。日本人は送り物の好きな国民ですね、と云われたが、お宅に呼んで下さるなどと夢にも思っていなくて、土産を全く持たない私への慰めの言葉だったのかも知れないなど後で思った。

パーティーの料理は、参加者各人の持ち寄り、予めCSPスタッフメンバーの間に紙が回され、何を持って来るかの調査がされていた。私は、料理を作ることもできないので、パスしたが、誰々サラダ、誰々サンドイッチと自分の持つて行く物を自筆してあった。お

客をする側に、誰が何を持って来て呉れるかが判っているのは、用意する物も決まるし、ずい分と合理的である。

カールもこの紙を見て、カールお手製の料理を一品出された。料理名も味も忘れてしまったが、オーブンで焼いた大皿のグラタン風のものであった。奥さんのヘレンさんは、とても弱っておられて、パーティーに付合っておられたが、やっと椅子に坐っているという状態で、料理を手伝うなど全く出来ないことが明瞭だった。カールが本当に料理したのだと感心した。

ヘレンさんは、次の年一九七九年三月に亡くなられた。全身が衰弱して痛々しく、カールよりひと回りもふた回りも老けて見えるのに、来客の相手を努めておられたのが、今も目に焼き付いている。



英語を学ぶ必然性が判らず、学生時代から最も不得手な教科目であった英語だが、カール・ロジャーズの本に出会ってから、これを英語で読みたい、またカールにも会いたいと思うようになって、英語が嫌でなくなった。

未だに英語には不自由しているが、カールのものは読むのがうれしい唯一といっても良い

英文である。

こんな私であるから、畠瀬夫妻の尽力で、ロジャーズ父娘が来日されることになり、出迎え役を引き受けることができたのは、望外の幸であった。

カールの来日目的の一つに、ロジャーズの思想が日本でどのように受け入れられているのかその実態を知りたい、ということがあった。このことへの直接的答えを我々はしなかったのであるが、カールはこんなことを知りたかったのか、とふと思うことがある。

それは、Person Centeredの行く末といったようなことではなかったか。Person Centered以外の思想を目下私も持ち得ないのだが、Personそのものところで、揺れ動く自分を感じるのだ。

人間は、自分の感覚から世界が始まって行くと思うのだが、現代はその感覚の判らない人が増えつつあるように思う。このような人にとってのPersonは、容易ではない。

またPerson Centeredが表面的に受け取られる時、忍従などによって生み出される精神の厚みなどが無くなるおそれもある。

もっとも英語が自由に話せたら、こんなことを色々とカールに問うてみたかった、と今頃になって思うのである。

天国で母からロジャーズ先生に

関 丕

天国では、どういふコトバが使われているのでしょうか。英語なのでしょうか。日本語、それとも、天国語というものがあるのでしょうか。いずれにしても、私は、母がロジャーズ先生に、次のようにお礼を述べているような気がしてなりません。

私の娘は、あなたにお会いしたり、あなたのお友達と仲良くさせていたことで、少しづつ「やさしく」なってきたように思います。自分の中に「やさしさ」があること、自分にも人を愛する心があることに気づき、それを大切にするようになって、人と共にいることの歓びを知るようになりました。

私が四回目の脳血栓で倒れ、コトバを発することも、ものを食べることも、身

体のどの部分も動かすこともできなくなった時、あの娘は、私の目をじっと見ながら、明るい声で

「母さん、こうして二人で、この病室に一緒にいられるって、本当に幸せよね」と言いました。私が、まばたきで「そう、本当に幸せだね」と応えましたが、「神さまは、私たちに一番良いことをしてくださるんだから、心配しないでおこうね。」と言いました。

ロジャーズ先生、「愛すること」は「共にあること」だということ、あの娘に教えてくださったのは、あなただと私は思っています。

主人と私は、プロテスタントのキリスト者でした。ですから、あの娘は幼い頃から、自分の罪に気づき、苦しみ、人を愛することなどできない人間ではないか

とまで思っていたようです。それは「自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」というヨハネの言葉（一五一一三）を、あの娘がとても気にいって、それを目標にしていたからです。しかし、全き愛など、人間には不可能であること、人間の心はうつろいやすいからこそ、神さまの前で頭を垂れ、謙虚になれるのだということ、言いかえれば、神さまの存在に気づかせるために、神さまは人間を不完全なものに創られた、だからこそお互い「やさしさ」が欲しいし、少しばかりの「やさしさ」で慰められたり、励まされたりするのだということ、あの娘はエンカウンター・グループやまわりの人々から教えていただいたように思います。

三年三か月の私の病院生活の間、あの娘は「母さんは、私にとって一番大切な人、何もなくても、私と一緒にいてくれるだけで、私はうれしいの」と言い続けてきた。あの娘が働きに行っている間は、必ずだれかがそばにいて「独りぼっちではない」ということを私に感じさせてくれました。ですから、私の病室は、とても明るく、色とりどりの美しい草花が一杯咲いているお庭のような雰囲気でした。沢山の人々の「やさしさ」を、からだであうけとめたあの娘は、人の愛の真

実を信じて共に、自分もまた人を愛することのできる人間だと思うようになり
ました。

私が天国へ参ります半年前に、あなたのよくご存知の多田治夫さんのご紹介で、あの娘は関雅美と結婚いたしました。娘の言葉をかりれば「私の魂が求めていた人と出会えた」という大きな平安の中にいるようです。長い間、自分と葛藤してきたあの娘にとって、心の奥深いところで、いろいろなことをわかち合い、愛し合えるパートナーに恵まれましたこと、これ以上の幸せはないと思っております。もし、あの娘がロジャーズ先生とお会いすることがなかったら、今だに完全性を追求し、自分にも他人にも敵しい批判の眼を向けつけ、人を愛せない自分に苦しんでいたかもしれせん。

ロジャーズ先生、ほんとうに、ありがとうございます。

ロジャーズ先生と一時間ばかり、お話をさせていただいたのは、一九六八年の夏、丁度昌瀬稔・直子両先生が、ラホイアにいらっしゃる頃でした。私は一か年の留学を終え、金沢に帰る一か月くらい前で、かなり神経質になっておりました。日本の高校で待ちうけているもの―一律教育―におびえていました。

ロジャーズ先生は、そういう私を、非常に自然にうけとめてくださって、「あなたの生徒②話すのですよ。」「あなたが、ここで経験したことを話してあげなさい。」と言われまして、②では無いのだな…と思ったことを覚えていきます。そして、自分の経験を話すということから、現在の、今の自分を語ることをおそれなくなりました。このことは、あの時、学ばせていただいたような気がしています。

ロジャーズ先生やカウンセリング仲間の

柔かく暖かい手

私が故カール・ロジャース博士の名に初めて触れたのは、昭和三十一年（一九五六年）頃であった。学部学生のことであったが、ある講義の中で、『非指示的』カウンセリングと呼ばれる方法（？）があり、その提唱者がカール・ロジャースである」ということを耳にした。

方々とおつき合いをさせていただいたことを、母が一番よるこんでおりました。私の微妙な変化に、母はとても敏感でしたから。「アメリカから帰ってから、母さんを束縛しなくなつたね。」と、うれしそうに話ってくれた母をなつかしく思います。母も大きな眼をしています。ロジャーズ先生と、眼と眼で、静かに交わりを深めて…と、私の想像は尽きる
ことがありません。

せき ひろ
●石川県教育センター相談課長

増田 實

しかし、その後数年間、私の関心は、ロジャースや彼のカウンセリングに向かうことがなかった。それは、この講義の内容やその雰囲気「非指示的」カウンセリングに対して否定的であり、それが私に影響を与えていたからであった。他人によって影響されて、自分自身でひとつのことに向かおうとしなかつ

た私の自発性の弱さを恥ずかしく思うが、それとともに、講義や教師の学生に対する影響についても、今さらながら考えさせられる。

昭和三八年（一九六三年）、私は初めてカール・ロジャースの著書を手した。その裏表紙には、その年の九月六日の購入日付けが記してあるが、その著書は、「カウンセリングと心理療法」(Counseling and Psychotherapy, 1942)である。これが、私にとって故カール・ロジャース博士との初めての触れ合いであった。勿論、その著書を通しての間接的な触れ合いに過ぎないのであるが、この本を手にしたときの喜びを今でも覚えている。そして、彼のカウンセリングに魅かれていく自分があったことを、今想起し出す。

「許容的な関係」、「個人の成長と自立性の強調」、「情動(感情)の重視」などが、カール・ロジャースのこの著書のなかで述べられていたことへの驚きがあった。そして、私が何となく感じていたことがこれらのことによって少しずつ明確にされ、共鳴の響きが私の中に起こってきた。

その後、昭和四八年（一九七三年）、私は初めて故カール・ロジャース博士に直接触れる機会を得た。これは、「ラ・ホイア・プログラム」(La Jolla Program)参加の折であっ

た。この時には、ことばを直接交わすことはできなかったが、彼の生の声を直接聴き、また、その素顔を三メートルほどの距離から直に見ることのできたことによる感動は、大きかった。この感動は、私の中に深く残っている。

実は、ロジャースを見聞きしたのは、このときが最初ではなかったのである。昭和三六年、彼の来日の際、東京での講演を私は聞いていたのである。しかし、このときには、私の中に未だ彼への関心が殆どと言ってよいほど芽生えていなかった。ロジャースに対してやや冷やかに客体的に眺めており、そのため彼を見聞きしても感動らしきものさえ起こらなかったのである。

感動をとまなうその人との接触こそ、初めての触れ合いと言えよう。それがあったのが、「ラ・ホイア・プログラム」でのコミュニケーション・ミーティングの場である。ゆっくりとしかも、内側から静かに湧き出るような話し振りに魅かれる思いがあったことを想起し出す。このプログラムへの参加経験が私に与えた心理的インパクトも大きかったが、ロジャースに直接触れることができた喜びも大きかった。

私にとって故カール・ロジャース博士との二度目の直接的な触れ合いは、昭和五八年

(一九八三年)のことである。この年の四月二六日、彼は人間関係研究会の招きで、令嬢ナタリーさんとともに来日した。成田空港に到着されたお二人をその日の夕刻四時頃出迎えたのであるが、これが二度目の直接的な触れ合いとなった。

われわれ(渡辺忠さん、岡部耕典さん、それに私)が成田に着いたときには、二人はずでに入国手続きを済ませており、同じ出迎える見藤さんと三人でわれわれの着くのを待っておられた。かえって、われわれ三人が迎えられた恰好になったが、挨拶とともに握手を求めてきた。慌てていたことに加えて不慣れであったので、やや落ちつかない気持ちでその手に応えて握手した。柔かい大きな手であった。このことが印象深く残っている。

柔かい大きな手との握手——これは、私にとってロジャース博士との本当の直接的な触れ合いであった。そのときには、柔かい大きな手という印象のみであったが、今想起し出すその手のなかに握手以上の何かが含まれていたのではなかったかと思う。

この折のワークショップのあるセッションでの質疑応答で、私の質問に対して「そのとおり」と言いながら親指と人差し指で丸い輪をつくって応えてくれたことがあった。このこたえは面接に関することであったが、そのこたえが、私のそれまで経験的に捉えてき

たことへの確証を示してくれたように思えた。このことは、私にとって大きな支えにもなるような意味をもった。彼の著書からも得られない直接的な触れ合いからの学びであった。

昭和五十九年（一九八四年）、私は故カール

・ロジャース博士と三度目の触れ合いを得ることができた。「第二回国際PCAフォーラム」(Second International Forum on the Person-Centered Approach) が開催されたイギリス（ノリッチ）でのことである。このときには、彼は前年の来日の折より元氣そうであった。夜の歓迎パーティでは参加者の何人かとダンスを踊り、その場をエンジョイしているようであった。われわれ日本人参加者のところにも近づいて来て談笑し、求めに応じてカメラに収まることも何度かあった。

私にとって彼がダンスを踊る姿を目にするのは、初めてであった。そのとき八二才のロジャースが踊るのに驚かされたが、それとともに人間カールに触れた思いでもあった。私もその踊りにひかれて踊り始めていたことをいま思い起す。

私が故カール・ロジャース博士と最後に触れたのは、昨年（昭和六一年、一九八六年）の九月であった。それは、ADPPCA (Association for the Development of the Person-Centered Approach) 第一回大会の開かれた

シカゴ大学であった。

PCAは、現在ひとつの潮流であり、私の関心もそれに向かっていることでもあったので参加しようとしたのであるが、故ロジャース博士が参加することもこの大会にひかれた理由として大きかった。

実は、いま思うと、これまで何度かロジャースと触れる機会を得ていたが、この大会には自分のなかに何か疼くものがあった。それが何であるのか自分でもよくわからないままであったが、それへの参加する疼きがあったことは確かである。そして、その疼きのなかで、「あるいはこれがカールと逢う最後になるかな」という思いがふと出て来たことを思い起す。「最後になる」などということとは、他言できることではないので自分の心の内にとどめていたが……。

シカゴ大学でのこのときの彼は、たいへん元氣そうであった。三年前の来日の折よりも二年前のイギリスのときよりも、さらに生命力を得ているかのようにであった。声にも、以前にも増して張りが出てきており、冗談も飛び出すほどであった。これ（？）が八四才の人かと驚かされた。

会場（インターナショナル・ハウス）のロビーで、待たせた人のソファーに向かって小走りに近い姿が、今でも印象深く私のなかに残っている。そのロジャースが何

故急に、という思いでいっぱいである。

この大会の最初の夜、参加者全員の夕食時に私はカールのところに近づいてゆき、再会の挨拶と握手をした。そのときの感触をいまでも思い起すことができる。「柔かく暖かい手」であった。



ロジャース博士とシルビア・マサダ（1986年9月7日）
シカゴ大学インターナショナルハウスにて

A happy reunion with Minoru Masuda and Sylvia, at the Association for the Development of the PCA, University of Chicago International House, Sept. 1986.

カールのこの「柔かく暖かい手」は、私に力を与えてくれた思いがする。私のパーソナル・パワー (personal power) を湧き立たせてくれた。共鳴のなかに、相手に力を与える手がそこにあった。その手は、いまはもう亡い。この夏にはラ・ホエアに行き、カールの墓参をしてきたいと思う。冥福を祈りながら……。

ますだ みのる
● 東京家政大学教授

甦るロジャーズ博士のほゝえみ

大須賀 克己

カール・ロジャーズ博士が他界されたことを聞いて、
私は深い淋しさを感じると同時に、どこか
神の国に、静かに召されていった博士を祝福したいような気持すらあります。
私が初めて博士に直接出会うことが出来たのは、1964年で、
既に23年の月日が流れてしまいました。私はその当時、
彼のカウンセリングの考え方に共鳴して、アメリカに渡ることになりました。
ロスアンジェルスから4～5時間のドライブで
サンディエゴの郊外であるラホヤという美しい街を訪れ、
そこで柔らかな微笑みで迎えてくれた
博士の姿がいつまでも心に残っております。
そして、私の個人的なカウンセリング研究のためにも援助してくれて、
彼がシカゴ大学で、共に仕事をしていた方を紹介してくれたことは、
忙しい中に、如何に彼が暖かく、
一人一人の人間に接していたかを感じさせられました。
またラホヤプログラムでは、多くの参加者の中に、
時に現われる博士の姿、
権威を表わすでもなく、又知識を感じさせる人でもない、
静かな、正に一個の人がそこに存在しているという感じでした。
私共は科学社会の中において、多くの知識を獲得してはいるものの、
その中に迷い続けています。
彼が、人間学的カウンセリングを強調するゆえんです。
それをひと言で云ってみれば、
知と暖かい心が共に調和しあった人間、
という表現をしてもいいだろうと思います。
我々は何れかにかたよってしまいがちです。
感情に溺れたり、知識に拘束されたり、
この二つの統合を、単純な言葉、つまり「受容的態度」という表現で
我々に伝えたのです。
限りなく深い言葉であるように感じます。

私共に課せられた任務は、博士の育てられてきたカウンセリングの心と本質を、
少しでも多くの人々に伝えることであると信じます。
及ばずながら、それに向かって努力していきたいと思えます。
ここに博士のご冥福をお祈り致します。

第四部 カール・ロジャーズと私

ロジャーズさんから

頂いた

「A WAY OF BEING」

野島一彦

一九八七年二月四日、私は新年度の大学の『講義要目』の原稿を教務課に提出した。その中で、〈外書購読〉については、ロジャーズさんの「A WAY OF BEING」を読む予定であると述べた。

数日後、私は村山正治先生からの電話で、ロジャーズさんが急に亡くなられたと聞かされ、愕然とした。亡くなられた日は、奇しくも私が原稿を提出した日であった。偶然に日が重なったと言えはそれまでだが、私の心の中に何かしら不思議な感じが湧き起こってきた。

私の手元にある「A WAY OF BEING」は、一九八三年春のロジャーズさんを迎えての国立婦人教育会館でのワークショップの時、ロジャーズさんから直接頂いたものである。ロジャーズさんを変えての最後のスタッフ・ミーティング

の場で、ロジャーズさんはそのワークショップを企画・運営した人間関係研究会のスタッフ一人一人に、自分のサインを入れた本をわざわざ準備して持ってきて、下さったのである。私は、そのようなロジャーズさんの細かな心遣いへの感激の気持と、もう二度と会えないのではなからうかという淋しい気持を抱きつつ、その本を有難く頂いた。その時の情景は今でも私の脳裏にまざまざと焼きついている。

いよいよ新年度に入り、学生達と一緒にこの本を読むことになったが、今の私にとってはこの本は、ロジャーズさんの私への遺書のように思えてならない。微力であるが、ロジャーズさんの遺志を受け継いでいければと思う。

のじま かずひこ
福岡大学人文学部教授

衰えない晩年

見澤めぐみ

カール・ロジャーズ博士とワークショップを共にしたころの私は、二〇歳代に

足を踏み入れたばかりであり、心理学者でもなければ、カウンセラーでもなく、ロジャーズ博士の著作に親しんだ者でもなかった。そのような状態で、私は、カール・ロジャーズ博士と六日間を共にした。

カール・ロジャーズ博士は、私から見ると、良いおじいちゃん、という感じだった。私のような分別のつかぬ、好奇心に満ちた若者とも、気軽に話して下さった。背が高く、堂々としていらしたけれども、人と向かい合うときには、背を曲げて、首を少し突き出すようにして、柔らかな顔つきと和やかな目で、相手を見られた。生活のさまざまな側面で自立しておられ、八〇歳をすぎても、なお、衰えることなく、日々の生活を楽しんでおられる、という印象を受けた。暖かな晩年だと思った。カール・ロジャーズ博士、ナタリー・ロジャーズさん、ワークショップで出会った人々、そしてワークショップ全体から、さまざまな有形無形のことを、私は得た。そのときの言葉、感情、雰囲気、事柄のさまざまな断片を、これからも、私は、時折思い起こしては思いをめぐらすことであらう。

みさわ めぐみ
東京大学大学院博士課程在学

ロジャーズ先生を偲んで

深 本 春 夫

巨星墜つ——凝然、御冥福をお祈り申しあげます。

想えば、昭和三十六年夏、かの日立市大甕の茨城キリスト教学園のキャンパスで、何もわからないままに、ロジャーズ先生のご風貌を拝し、ついで六甲山ホテルでのワークショップにも参じることが出来て、幸せ致したのでございました。そして、五十八年五月三日、二十二年振りに、師のお年令に似合わぬお元気なご様子に接することができまして、そのご壮健ぶりをはるかに、およろこび申しあげたことございました。

思いがけないご奇禍によるご急逝はまことに無念やる方ないことではございますが、恐らくはその直前までロジャーズ先生には、永年の自己鍛練の成果から達せられた自在の生を十二分に生き切つて

いらしたと拝察申しあげます。あの、

五月三日の一日研修の際にご披瀝なすつておられました師の哲学のご思索の一端は、さすがにカウンセリングを通じ、晩年はエンカウンター・グループ、あるいはパースン・センタードのご体験をもとに体得された、深奥な人間性理解を基底とされたものだけに、まことに示唆に富んだお話でございました。きつと、ロジャーズ先生にはその御思索をこの世にいます限り、深めていかれたことならんと存じます。そうしたこと考えますと、ロジャーズ先生には、現代には稀にみる「真人」としての生を全うされなすつたものと、景仰の思いを今更ながら深くするのでございます。

とるにたらぬ浅学愚鈍の私ごときが、カウンセリグの一端にふれ、そこからロジャーズ先生のお名前を存じ上げることができましたことを、この上ない幸せであつたと、つくづくと感謝申し上げます。

ふかもと はるお
●前関西産業カウンセラー協会理事



三〇分の 真実の關係から生まれた

一五年

伊 藤 義 美

カール・ロジャーズ博士が急逝されたことを野島先生からの通信で知った。亡くなったことの衝撃ばかりが大きく、どんなに亡くなりかたをしたのか詳しいことは一切わからなかった。あれほど偉大な人物だからと四〇五種類の新聞をあたってみたが見つけることはできなかった。日本の新聞のニュース・パリアーはないということか、などと思ってしまった。筆者は、昨年、増田先生の海外研修ツアーに参加するべく申し込んでいたが、その企画は都合で中止となった。そのツアーにはラフォーイヤー・プログラムへの参加が含まれており、ロジャーズ・アワーに大いに期待を寄せていた。直接会って聞いてみたいことがあったが、ついに永遠に見果てぬ夢となつてしまった。

二〇年以上前のロジャーズの心理療法の実際についてはヴェイデオ・テープによって知ることができる。「グロリアと三人のセラピスト」におけるロジャーズである。グロリアの死 (untimely death) 後、数年たつてから一九六四年の心理面接—約三〇分—のその後についてロジャーズは簡単に書きとめている。それは、グロリアとのインタビューがなされて一年かそれ以上あとの西部行動科学研究所のウィークエンド・カンファレンスにおけるグロリアの経験と行動である。ひとつは、パールズ博士とのインタビューについての反応であり、もうひとつはロジャーズ夫妻とのかかわりである。ロジャーズとグロリアの交流は、グロリアの死まで一五年間続くことになる。真実の人間として出会った三〇分できつくりあげた関係から一五年の交際が成長したという事実には畏敬の念をおぼえると感じているが、そこにロジャーズの精髓を感じさせてくれる。

心からロジャーズ博士のご冥福を祈る。

いとう よしみ
名古屋大学教養部講師



カール・ロジャーズと私

永原 伸彦

カール・ロジャーズ博士がその生涯を終えられたとの報を聞き、心から哀悼の意を表します。そして、その生涯を通して我々に勇気と希望を与え続けられたことに、あらためて深く感謝するものであります。

カール・ロジャーズという人の存在を私をはじめ知ったのは、学生時代の教育心理学の講座においてでした。そのテキストにロジャーズ全集から抜き刷りされた「学生中心の教授」が使われていました。私はその時二十才でした。少々生意気で、その実不安がいっぱいの青年であつたと思います。そんな時にロジャーズ博士の本に出会いました。

「本書は、多くのひとびとの心の所産であり、数かぎりないグループの交流の成果であります。……」という文章で始まるロジャーズ全集の序文に接したとき、なぜか私の胸のうちから熱いものがこみ上げてきました。私は夢中で読んだと思

います。学生寮の暗い一室で読み続けました。冷静な読み方ではなかったと思いますが、私は求めていたものに会ったと感じました。読むこと自体が、ロジャーズ博士のもとでカウンセリングを受けているといった感じでした。

私はロジャーズ博士の本に出会って本当に良かったと思います。それは、自分という人間がこんなにも傷ついていたのかということが、実感をもってわかってきたからです。それは同時に、自分へのいとおしき、なつかしさといった感情を呼び起こしました。私は少しづつ、自分に対して柔らかく優しいままざしを向けられるようになったと思います。

あれから二十年。この自分を本当に大切にすることとは、奥が深くなかなか難しいことではありますが、あの時以来、生きる上においても、カウンセラーとしても、私の考えの基本をなしていると思います。

カール・ロジャーズという人は、これからも私にとって、最も苦しいときにあらわれて、私を受けとめ、私が私自身を大切にすることを手助けしてくれるカウンセラーであり続けると思います。

ながはら のぶひこ
朝来盛商工経済会人間関係研究所

我々はロジャーズから

何を学んだか？

保坂 亨

私は今からちょうど四年前、一九八三年五月、ロジャーズの二度目の訪日の際のワークショップに参加して、大勢のメンバーの一人として彼に接したにすぎません。しかし、その折の私の印象では、ロジャーズは、日本で自分の理論、実践がどのように理解され、展開されているのか、ということに非常に関心を持っていろいろに思えました。私自身は、「ただ十分に消化されていないのではないか」といったことを伝えたのですが、その後、折にふれ、この問題を自分なりに考えてきました。そこで、追悼にあたって、このことについて少し書いてみたいと思います。あらためてロジャーズの問いに答えるために。

この問題に関して、誤解を恐れずにあえて極端に言ってしまうえば、私たちは、偉大な父ロジャーズの真の姿を、受容的

な日本文化という母の懐の中で、十分にみきわめきれずにいるのではないでしょう。か。今だ、母を通しての「受容、共感」という幻想の中にとどまっていた、父の示す「純粋性」という厳しい現実の荒波へと旅立ってはいない、と言ったら言いすぎでしょうか。ロジャーズが日本に紹介されてから、すでに四〇年がすぎようとしていることを思えば、残念ながらその考えは十分に消化されているとは言いがたい、というのが私の率直な印象です。

なぜそう思うのか、そこからいくつかの課題が見えてきそうです。ひとつには、ロジャーズの初期の変化が十分にとらえられていないのではないのでしょうか。明らかに、初期の技術志向の非指示的療法から、治療者への態度を重視する来談者中心療法への変化があると思います。この変化をおさえていないと誤解が生じる危険があるように思います。

第二に、ロジャーズ理論の中核ともいえるべき治療者の態度条件（純粋性、共感的理解、無条件の肯定的関心）が、十分に吟味されていないのではないのでしょうか。特に日本文化独特の理解をしてしまった「受容（≠無条件の肯定的関心）、共感」と「純粋性」との関連があいまい

なままに思えます。ここにも誤解の落とし穴があるようです。

第三に、ロジャーズが分裂病者へのアプローチを開始してからの展開がおさえられていないのではないのでしょうか。この壮大な実践的研究のもたらしたものは、あまりに複雑でロジャーズ自身十分に整理できているとは言いがたいようです。そして、ここからたくさんの貴重な知見が読みとれると思いますが、それらが来談者中心療法の展開の中に位置づけられているとは思えないのです。これは、まさにロジャーズ以降の研究者の課題といえそうです。

こうして考えてくると、ロジャーズ理論の継承・展開にあたって、やるべきことは山積していると言ってよいでしょう。父の残した遺産が大きければ大きいほど、それを相続していくのはたいへんなことです。しかし、まず、その遺産がどのようなものかを十分に吟味するところから始めなくてはならないでしょう。

「ロジャーズは何を残したのか」そして、「我々はロジャーズから何を学んだのか」というところから出発したいと思えます。偉大な父をのり越えて進むために。

はさかとおる

●東京大学学生相談所助手

実感・体験・仲間・書物

柳沢 裕

私が所謂臨床心理の分野に出会ったのは、ユングおよび河合隼雄氏の本だった。ロジャーズという名前が強く頭に残り始めたのは、それから数年たつて日本カウンセリング・センターへ通い出して、そのグループの場でしばしば言及され、全集などをめくるようになってからだつた。

私はそのころ、周囲を厚いもやに包まれたようで、ただただほろを出さないように、破綻をしないようにと縮こまっていて、自分の生き生きした感情、動きといったものが失われていた状態だったように思う。毎日が重苦しく自信がなく、何をやっても物足りなく、自分自身で何事かをやったという手ごたえを何年も経験していなかった。

しかし、「このままではいけない」と

の深奥の声に促されたかのようにセンターへ通い出したのだった。そこで今まで漠然と希求していた学習の場、体験の場、仲間が「あっ実際に存在しているんだな。諦めちゃいけないな」というふうに実感されて、新鮮な血が再び流れ出したように思う。

その時から、全集やそれ以後の本を次々に読み出した。「あっ私が今まで心の奥で、私の体全体でほんやり感じていて、でもそんなうまくは事は運ばないと打ち消していたことを、この人はごく当たり前のように言っているじゃないか」と強く思い始めた。本を呼んでいる最中心の奥から、怒り、喜び、言葉では表現し尽くせない何か湧きあがってきて、長い間の自分とちがうような生命力を感じた。

これからの私は、所謂三条件を、一人の時、グループ、日常、職場、地域で、私自身どのようにバランスをとってゆくか、私独自のものを、実感的に体験的に摸索してゆこうと思っている。



●やなぎさわひろし
塾教師

カール・ロジャーズの
印象

穂積 清美

原稿を書こうと思い、一九八三年の春のワークショップのことを思い出していましたが、いろいろな印象が重なり、何か書いていいか、わからない状態です。何かから書こうかと思はれ、思い迷った時、すつと浮かんできたことは、『私の中に変な構えがあってなかなか書けなかった。例えば、よりよく表現するためにはどうすればいいか、何かから書けばよくまとまるか』など『文章を書くには当然考えることだとは思いますが、日常でも知らず知らずまわりを意識して動きにくい状況が多くなっているのだからと感じました。この時、『あっ、私がロジャーズに感じた一番強い印象はこの点での驚きだった』と思いました。彼は本当に正直でオープンな人、構えとか、捉われのない人だなあと、ワークショップのいろいろ

な場面で感じたものでした。

ワークショップの最初のセッションで、カールとナタリーの対話がありました。日本では親子での対話はちょっとした照れなどがありそうで、こういう場合は余り設けられないだろうと思いつつ話をきいていました。お二人とも一人対個人という感じで、お互いを尊重し合って話されているのがとても印象的でした。

カール・ロジャースという人を父にあって、娘としてはどんな風に育てられ、どのような影響があったのだろうかという点に関してはすごく興味がありました。ナタリーにしてみれば、へ父の人を尊重する態度、哲学に大きく影響を受けたということであり、それがよかつた面と、逆に人に耳を傾けるあまり自分自身がわからなくなってしまう時期もあったと述懐していました。

これは同時に日本に於いて、カウンセリング界で彼の理論、技術を取り入れる過程で同じような現象が起きているのと同じなので、カールがそれに対してどう答えるかがとても興味深く思われました。彼は自分にもいくらか責任はあったと思うと素直にそのことに対して受けとめ、同時に、相手に耳を傾けることの大切さ以上に自分に耳を傾けることの大

さを強調されていました。

日常の家庭生活でも決してカウンセリング場面のような理想的な状態で家族に接しつづけられることはできないし、又、できないものではないと認めるべきだというように、構えのない、彼自身の内からの声を大切にされている感じがとてもよく伝わってきました。ロジャースの家庭は、父カールに備わった人格的なものから受ける影響は大きかったとは思われますが、自説を家庭に無理に持ち込むということではなく、ごく自然な触れ合いの家庭だったのだろうと、お二人の話をきいているうちに、私には想像できませんでした。

又、一緒に居ると「偉大な」という面を忘れてしまうほどの派手でないごく親しみやすい「おじいさん」という感じがするのですが、ところが考えている事、行動に移す事というスケールの大きい事にびびります。世界を舞台に、対立している人達がいかに、理解し合えるかというテーマに、自らアフリカで黒人と白人のエンカウンターグループをもたれたり、最近では（ワークショップ後、一九八六年）ソ連に行かれて、そこで人間

ことでした。

私達からみるとすごいこと、大変むずかしいことのように思えるのですが、実際の彼の様子を見ると『自分としては当然のことをしている』というように伝わってくるものがあって不思議な感じがしたのを覚えています。これは何なのだろうと考えてみると、やはり彼のへ人を信頼する、この大きさを改めて感じます。自分の内からの声に耳を傾け、自分を信頼し、そして相手を信頼すれば、あとは行動に移すまで、と、非常に前進的な積極的な面が伝わってきて、思わず私の中にも力が湧いてくるような感じでした。

彼のパーソンセンタードアプローチは、彼の実感であり、信念なのだなぁと、今まで書物などから受けとった物とは全然別の（ロジャースという人を通して伝わってくるもの）を感じたことは、とても感慨深いことでした。

そういう点からしてみるともう一つの印象として「悲観的でない」というのも強く残っています。「老いを生きる」というセッションでのことですが、私達日常では、年をとることにかなり否定的な感じをもっていると思います。体が思うようにならない。死に対する恐れなど。

ところが彼の話をきいていると自然なことは当然として受けとめて、その上で何かよい感じを味わっているというような印象を持ちました。

例えば、年をとってから、より多く学べることの重要性、更に活動していきたい意欲をもたれるというようなことを話されていきました。又、お一人になられた淋しさを体験はしたけれど、時間がたつうちに一人でいることの自由さも楽しんでおられて、一人で食事を作ったり、海岸を毎日3kmも散歩されるなどの生活をしているということでした。

こうして書いてみて、私の中にいろいろな印象が重なっていくうちに、ロジャーズの総合的な印象として「自然な」という感じがとてもびったりしてきました。彼自身の内に感ずるものに率直に行動して、彼らしく自然に生きている。その過程で、我々が思うところの「偉大な」足跡を残し、我々を導いて行ったのだが、彼にとっては、もちろん努力なくしてはありえないことだが、それをも含めて「自然な」ことだったのだろうかとしみじみ感じてきました。

はづみ きよみ
●南大塚診療所カウンセラー

ロジャーズ先生と私

小柳 晴 生

ロジャーズ先生に直接お目にかかる機会を得たのは、一九八三年のロジャーズ・ワークショップである。今でも五月のむせかえるような若葉とつじの花、そしてロジャーズ先生を迎え高揚した熱気に包まれた国立婦人教育会館が思い浮かぶ。その緑の中にロジャーズ先生は静かに佇んでおられた。そして、穏やかな語り口であったが、信念は断固として主張される方であった。私の中のイメージと本当に一致した姿であった。

ところで私は、ロジャーズ先生の著作を日本語で読んでいたし、私達日本人にも馴染みやすい風貌でもあるので、自分の中で勝手にコミュニケーションができるかのように思っていた。しかし、当然のことなのだがロジャーズ先生は英語し

か話されず、一方私は日本語しか話せなかった。ロジャーズ先生はどなたとも気さくに話された。話そうとすればすぐできるほど身近に感じるのに、自己紹介すらままならない自分もどかしかった。この時ほど英語ができないことを悔んだことはない。せめてロジャーズ先生のまわりをしばしうろつくか、一緒にスナックにおさまるしかなかった。今手元に残る一葉の写真は、私にとって貴重なものとなった。

もし英語が話せたならば、ロジャーズ先生に次のようなことを伝えたかった。



国立婦人教育会館にて、(1983年5月)

Chatting happily with workshop participants, May, 1983

「ロジャーズ先生の考えは日本においても世代から世代へと受け継がれているし、そして大切なことは先生に盲従することではなく、それぞれが自分なりの道歩んで、その結果がロジャーズ先生思想と同じ『質』のものであれたいいと考えている」と。

残念ながらそれは果たせなかったし、今ではもはや叶わないことになってしまった。

カウンセラーとして八年目。最近とみに問題点を指摘し、説教に傾きがちな自分を見つけて嫌になっていた。そんな時、ロジャーズ先生の「私は人に教える（*each*）ことはできない。ただその人が学ぶのを援助する（*facilitate*）するだけである」という言葉を見つけ、あらためて新鮮な思いで眺め、早速座右の銘として写真とともに面接室に飾った。

面接に行き詰まった時、今一度この言葉を思いだして、クライエントの言葉に耳を傾けると、不思議なほど自らすすんで問題に気付き、直視し、摸索し、解決を見出してゆくその姿に本当に驚かされている。

科学技術が進歩すればするほど、「人間に変えられないものはない、解決でき

ない問題はない」という風潮が強まるだろう。この風潮はカウンセリングの分野にも影響を与えずにはおかないと思う。人が人を変えようとする技法が次々と編み出される危惧を感じている。そうした新しいと称する技法が、ロジャーズ先生の考えをかき消さんばかりに鼻息も荒く提唱されるであろう。そういう時代を迎えればこそ、「人は人を変えることができないう」というロジャーズ先生の言葉は、ますます重さを増してくるに思う。

おやなぎ はるお
● 香川大学保健管理センター助教



本誌中、「ロジャーズ」と「ロジャーズ」の二通りの表記が使われています。それぞれ翻訳における歴史的経過がありますので、著者の意志を尊重し、統一しませんでした。又、「ロジャース」の表記も同様に扱いました。

ロジャーズ先生の永眠を報じた新聞の見出し

(Andre Auwさん提供によるニューヨーク・タイムズ紙とサンディエゴ・ユニオン紙の1987年2月6日の新聞から)

D16

L

THE NEW YORK TIMES, FRIDAY, FEBRUARY 6, 1987

Carl R. Rogers, 85, Leader in Psychotherapy, Dies

A-12 The San Diego Union

Friday, February 6, 1987

Rogers: Psychotherapy pioneer dies at 85

大須賀 発蔵氏

『仏教伝道文化賞』受賞

本誌四号に『華嚴経の一節に見る葛藤の克服課程とカウンセリング』を寄せられた大須賀発蔵氏は、本年三月、財団法人仏教伝道協会の第二十一回仏教伝道文化賞を受賞しました。

大須賀氏は、カウンセリングやエンカウンター・グループなど人間性回復運動を仏教現代化の具体的場として把らえ、東洋の知恵を産業・教育・心理臨床の領域に伝える実践を行ってきました。

仏教やカウンセリングの精神を会社経営に生かし、また産業の発達が生んだ心の歪みを産業界自身の責任で解決するために茨城商工経済会に人間関係研究所を設立し、広く地域社会に心理臨床の場を提供する活動が評価されての受賞です。

また、大須賀氏は、五月にこれまでの数々の体験を基に著書を著わされましたので紹介します。

— 東洋の心を生きる —

『いのち分けあいしもの』

(柏樹社刊・一五〇〇円)

最近の学会誌から

『人間性心理学研究第四号』に、次の2編のグループ関係の論文が掲載されています。

小野 修 「登校拒否児の治療—親のグループ・セラピーによる治療
経験より得たもの—」

高松 里 「日本のSELF-HELP GROUP
に関する文献と研究の現状」
『人間性心理学研究』は、会員以外の人
も購読できます。希望の方は九州大学教
育学部村山正治先生まで連絡下さい。
〒八一二 福岡市東区箱崎六一一九—二

一九八七年度人間関係研究会

ワークショップ・プログラムの御案内

今年度の人間関係研究会ワークショップ・プログラムができました。御希望の方は、七〇円切手を同封の上、左記申込み先までお申込みください。

▼申込み先：〒一四五 東京都大田区上池台一—三四—二六 渡辺方 『人間関係研究会事務局』 ㊟〇三—七二九

— 三六二二(二〇—二三時)

編集だより

■次号の案内 六号は六二年一二月発行予定、九月末が原稿締切です。E・Gでの体験、研究レポート、本の感想など、編集事務局までお寄せください。

■編集後記 二月にロジャーズ先生が他界され、急遽追悼号を組みました。畠瀬・谷口両先生の尽力で、御令嬢のナタリーさん、日本のカウンセリング発展に尽くしてこられた先生方を始めとして、多くの方々から追悼文を寄せていただくことができました。感慨深い編集作業でした。(〇)

■五号編集委員 畠瀬稔・谷口正己・小柳晴生 (編集事務担当) 小柳欣子

■購買方法 原則として定期購読制で、年間購読料は一、〇〇〇円(郵送料込み)。添付振替用紙でお申込み下さい。

▼購読申込み先 〒七六一—〇一 高松市屋島中町三八三—三・五〇七 『EN COUNTER』編集事務局 小柳晴生 ㊟〇八七八(四三) —六四四四

▼郵便振替 加入者名 人間関係研究会編集事務局 振替番号 徳島 八一—三六五二—

創元社

〒530 大阪市北区西天満1丁目4-2
〈支店〉東京都新宿区山吹町77番地



カール・ロジャーズとともに

島瀬直子・島瀬稔・村山正治編 ロジャーズ父娘を日本に招き、日本のカウンセリング界の人々と共に五泊六日のワークショップを行った折の記録。 1500円

エンカウンター・グループ

C. ロジャーズ 島瀬稔・島瀬直子訳 自己をありのまま表現し、人間的に成長する機会となる「エンカウンター・グループ」の実態と意味を解説。 1600円

人間尊重の心理学

C. ロジャーズ 島瀬直子監訳 心理療法の権威が自らの思想や活動の歩みをふり返り、教育のプロセス、その未来、新しい心理学等をつづる。 2000円

人間の潜在力

C. ロジャーズ 島瀬稔・島瀬直子訳 個人の潜在的可能性を最大限に引き出す人間中心のアプローチを、家族、教育、企業など広範な分野から考察。 2000円

人間としての心理治療者

M・F・ウイナー著／佐治守夫監訳
自己開示の適用と禁忌について、その有効性と制約を追求。

佐治守夫・飯長喜一郎編
カウンセリングの核心を学ぶための平易明快な古典入門

〔新書〕 六五〇円

心理臨床の探求・ロジャーズからの出発

村瀬孝雄・野村東助・山本和郎編
ロジャーズとの出会いを原点にして心理臨床の行方を探る。

〔選書〕 二四〇〇円



有斐閣

東京・神田神保町2 / ☎03-264-1311

人間関係研究会刊行資料

申し込みは研究会事務局まで
ご送金は、郵便振替 東京9-37428
(¥1,000以下は、切手可)

- | | | | |
|-------|--|--------|-------------|
| No.1 | 島瀬 稔 「身体接触を伴う人間関係促進の一技法(改定増補)」1972 | (価200円 | 〒120円…40g) |
| No.2 | 小野 修 「自分がよみがえった エンカウンター・グループへの参加経験」1971 | (価200円 | 〒120円…40g) |
| No.3 | ロジャーズ, 1967(小野 修訳)「学校組織の主体的変革のための計画」1971 | (価200円 | 〒120円…45g) |
| No.4 | 島瀬 稔 「エンカウンター・グループについて 来談者中心療法の行動科学的発展」
〔「教育と医学」18巻1号より転載〕 | (価200円 | 〒120円…30g) |
| No.5 | ジェンドリン&ビービー, 1968(小野 修訳)
「体験グループ グループのためのインストラクション」(増補改題), 1972 | (価200円 | 〒120円…40g) |
| No.6 | 北島 丕 「高校生のためのグループ・カウンセリング」1976 | (価800円 | 〒240円…180g) |
| No.7 | 増田 実, 東山紘久, 清水信介 「ラ・ホイヤ・プログラムへの参加経験」1977 | (価200円 | 〒120円…40g) |
| No.8 | 島瀬 稔 「企業における人間関係の改善について エンカウンター・グループの導入」1979 | (価200円 | 〒120円…30g) |
| No.9 | 渡辺 忠 「職場のチーム・ビルディング 人間中心の組織づくりのために」1985 | (価300円 | 〒170円…60g) |
| No.10 | ナタリー・ロジャーズ(坂川雅子訳)
「母と私 鏡の中を覗いて」『生まれ変わる女』より1986 | (価200円 | 〒120円…35g) |
| No.11 | 野島一彦 「わが国の「集中的グループ経験」に関する文献リスト(1970~1980)
〔福岡人間関係研究会資料 No.11〕 | (価400円 | 〒170円…60g) |

ENCOUNTER

出会いの広場 No.5

カール・ロジャーズ追悼号

発行所 人間関係研究会 1987年7月1日
〒145 東京都大田区上池台1-34-26(渡辺方)編集事務局 〒761-01 高松市屋島中町
383-3・507(小柳方)
印刷 株式会社美巧社 高松市多賀町1-8-10